
デジモンGATEstory

鷲原シュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンGATEstory

【Nコード】

N4980N

【作者名】

鷲原シュン

【あらすじ】

野球少年の宮原卓也はある日、バッテリーの天野卓、幼馴染の若槻真琴とともに不思議な世界へと飛ばされた
そこで待っていたのはさまざまデジモンたちとの出会い
そして七大魔王デジモン率いる闇のデジモンたちの戦いだった

GATE：0 始まり（前書き）

まずはエピソードなわけですが

デジモン小説の癖にデジモンが全く出てきません（次から出てきます）

GATE：0始まり

神奈川県川崎市

多摩川沿いの野球場でこの日、中学生達が野球の試合をしていた
「ストライク！バッターアウト、チェンジ」

ちょうど9回の表が終わったところ、キャッチャーが立ち上がり、
ピッチャーの少年が彼に近づくと

「相変わらずいい指示出してくれるじゃん」

宮原拓馬（みやはらたくま）

川崎市立第三中学二年

ポジション：ピッチャー

特徴：茶髪のツンツン頭

「いや、拓馬のコントロールもさすがだ」

キャッチャーの少年がマスクを外し、拓馬の呼びかけにこたえる
それと同時に川原から黄色い声援が飛ぶ

天野卓（あまのすぐる）

川崎市立第三中学二年

ポジション：キャッチャー

特徴：サラサラの黒髪とかっこいい部類の顔

九回裏、卓が構えた状態のままボールを見逃す

「アウト」

そして次の拓馬の打順に回ってきた

「拓馬、あのピッチャーはもう疲れてきてる、三球目が勝負だ」

「了解」

「まったく、卓の分析力にはまいるな、監督の俺を軽く上回る」
ひげを生やしたメタボの監督が裂きイカを食べながら愚痴ってた

バットにボールが当たる音とともに外野を飛び越した

「ホームランだ！流石川崎の最強バッテリー！」

「試合終了、1 - 0で川崎市立第三中学の勝利」

『ありがとうございます』

「二人ともお疲れ」

テニスウェアの少女が二人に声をかけた

「よ、真琴」

若槻真琴

川崎市立第三中学三年

特徴：茶髪のポニーテール

「若槻先輩、テニスの帰りですか？」

「そ、一セット6 - 0」

大勝利と指でブイサインを作る真琴

「お〜い！拓馬！」

「お、父さん」

「試合終わったんだろ、送ってくぞ、あ〜、真琴ちゃんと卓君も一緒か、どうだい！二人も！昨日お中元でもらったクッキーがあるんだ」

ということだ

「今日も大勝利」

「そうか、じゃあ母さんに報告せんとな」

そう言つて拓馬の父は席を立つ
いったん二人を家に送って着替えさせてから拓馬の家でお茶会となつた

因みに拓馬の父はどこへ行ったかというと

「六年前だっけ？お母さんの乗った車が事故つたの」
仏壇のある部屋だ

「ああ、奇妙なことに一緒に乗ってた生まれただかりの妹が見つか

らなかつたんだ、母さんは救急車が来た時すでに手遅れで……」

すると突然ピピピピという奇妙な音が鳴りだした

「あれ？父さんにもらった時計が」

因みにこの時計はいわゆるペアウォッチというやつで拓馬の父が死んだ母と使っていたものだ

母の時計は事故現場から発見されなかったらしい

「俺のもだ」

「私も、一体何なのかしら？」

すると三人の腕時計が光だし、三人が光に包まれる

光が消えた後、三人の姿はなかった

GATE：0 始まり（後書き）

いかがだったでしょうか

既にパートナーデジモンを何にするか決めてあります
それでは次のお話をお楽しみに

GATE…1出逢い(前書き)

はい、いよいよパートナーデジモンとの出逢いです
それではさうぞ

GATE：1 出逢い

目を覚ました拓馬の視界に真っ先に入り込んできたのは

「あ、起きたか？」

犬とも熊とも見える謎の物体だった

「ぎゃああああああああああああ！なんだお前！」

「俺、ドルモン」

ドルモン

獰猛な性格だが一度噛みついた相手にはすぐなつく
必殺技はメタルキャノン

「どうした？うわ！なんだこいつ」

近くで目を覚ました卓の膝の上にもでっかいハムスターがのっかっ
ていた

「で、でっかいハムスター」

「ハムスターじゃないよ、僕パタモンだよ」

パタモン

大きな耳で飛ぶこともできるが歩いてると変わらない
必殺技はエアースイット

「うわあああ！」

「今のって？」

「若槻先輩？」

二人が突然聞こえた悲鳴のほうを向くと

真琴と茶色いウサギがでっかい蜘蛛から逃げていた

ロップモン

かわいい見た目と違いかなりの実力を持つ
必殺技はブレイジングアイス

ドクグモン

全身をコンピュータウイルスに侵され凶暴化した
必殺技はステインガー・ボレーション

「おい、なんだあれ」

「蜘蛛だろ」

「そっか、蜘蛛か、とりあえず」

「逃げるー！」

一瞬現実逃避しかけたがそれぞれドルモンとパタモンをひつつかんで逃亡

「なんだ、逃げんのか？情けないな」

「おいドルモン引っ掛かる言い方だな、あんなでかいの俺達が敵うわけないだろ」

「人間つてのは情けないもんだな」

「あ、お前また情けないって言ったな」

そう言つてドルモンは拓馬の手を振りほどきドクグモンに向き合う
「喰らえ！メタルキャノン」

そう叫んだドルモンの口から小さな鉄球が放たれる

「おお！口から鉄球が」

そしてそれはドクグモンの額に当たった、ドクグモンはちょっと首を振ると再び走り出した

「一瞬しか効いてねえじゃねえか！！」

そして拓馬たちも再び走り出す

「ねえ、今気付いたんだけどさ」

「なんだよ！」

「私たちの時計、なんか変な形になってるんだけど」
「は？あ！本当だ、なんなんだこれ」

拓馬たちの時計はけ異常が変化し、三人とも同じデザインになっていた

強いて言うなら拓馬の時計は一部が蒼、卓は緑、真琴は赤になっていた

「それはD・ウォッチ」

するとどこからか声が聞こえてきた

「は？今の真琴か？」

しかし彼女はキョトンとしている

「じゃ、誰が？」

と、行ったところで拓馬は誰かにぶつかった

「つて、ん？」

そこにはぬいぐるみを抱いた小さな女の子が立っていた

「おかしいだろ、なんで俺の方が倒れるんだよ

「そのD・ウォッチが、進化の門を開いてくれる」

「は？進化の………門」

「言ってる場合か！追いつかれたぞ」

拓馬が振り返ると確かにドクグモンが間近に迫ってた

「なあ、それってどういう」

しかし振り返るとそこにはすでに少女の姿はなかった

「門を、開く………」

「どうしたんだ？」

彼の近くにドルモンがよってきた

「やってみるか、物は試しだ！」

すると彼のD・ウォッチが輝いた

「ゲートオープン」

GATE OPEN

Evolution

「ドルモン進化！」

なんと彼が叫ぶと蒼い輪が現れ、ドルモンがそれをくぐると、
どん姿を変えて言った

「ドルガモン」

最終的に翼らしきものが生え、グリフオンのような姿になった

「僕たちも」

「ええ」

一部始終を見ていた卓たちも試してみた

「「ゲートオープン」」

G A T E O P E N
E v o l u t i o n

「パタモン進化」

「ロップモン進化」

パタモンはヘルメットをかぶった天使に、ロップモンは格闘家に近
い姿に変化した

「エンジエモン」

「トウルイエモン」

「おお、台詞適当だったけどうまくいった」

「「適当だったのか！」」

などと、ボケてる場合じゃない

「ステインガー・ボレーション！」

ドクゲモンの口から紫色の液体が放たれるも三体は難なくかわす

「ヘブンズナツクル」

「カントレット 巖兎烈斗」

エンジェモンとトウルイエモンが上下からドクグモンの顔面に拳を放った

「うわ、痛そう」

続いて正面にドルガモンが構えていた

「パワーメタル」

先ほどよりも大きな鉄球がドクグモンの顔面を直撃した

「ぐ、ア、アスタモン……………様」

そう言っただクグモンの体は粒子となり消滅した

「すげーよ、ドルモン！」

「俺もまさか進化できるなんて思わなかったぜ」

「見事だ、パタモン」

「えへへ、ありがとう」

「かっこよかったよ、ロップモン」

「ありがとう」

「で、一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「ここ、どこだ？」

拓馬のこの台詞でドルモン、パタモン、ロップモンの目が点になった

「お前、知らなかったのか？」

「ああ、いきなり時計が光ったと思ったならこんなところについてて」

「ここはデジタルワールド」

「……え？」

三人が振り返るとさきほどのぬいぐるみを抱いた少女の姿が

「そしてあなたたちは、D・ウォッチに導かれた」

果たしてこの少女は何者なのか

続く

GATE：1 出逢い（後書き）

というわけで、第一話終了

言わないでください、ドルモンと拓馬の最後のやり取りがクロスウ
オーズと被ってるとか

進化の演出がシ クロ召喚に似てるとか言わないでください
それでは第2話もお待ちいただけましたら幸いです

GATE：2 デジタルワールド（前書き）

さて、第三話です、今回は味方のデジモンも登場します

GATE：2 デジタルワールド

ドクグモンを退けた拓馬たちの前に現れた謎の少女
彼女は一体……？

「ここはデジモンたちの世界、そしてあなたたちは、そのD・ウォ
ツチに導かれた」

それだけ言っただけ少女は去ってしまった

「なんだっただろう、あの女の子」

「ぬいぐるみを抱いてたしぬいぐるみの女の子でよくね？」

「ちよつと待て、普通になぜの少女でいいんじゃない」

「ぬいぐるみの女の子に賛成、だってセオリー通りじゃつまんない
もの」

「おつし、決まり、あの女のこの呼称は、ぬいぐるみの女の子だ」

「賛成！」

「ちよつと待て、それでいいのか、お前らのネーミングセンスそれ
でいいのか？」

拓馬と真琴のペースに自分のペースを崩された卓だった

しばらく歩いてると茂みが揺れていた

「ぬいぐるみの女の子かしら？」

「もしかしたらさっきの巨大蜘蛛の仲間かもしれない」

「ドクグモンだよ」

真琴と卓の発言にパタモンが突っ込みを入れるが

「ドルモン、もう一度進化だ、あの化け物蜘蛛だとしたらそのまま
じゃ勝てねえ」

「だからドクグモンだ」

「誰がドクグモンですか？」

茂みから出てきたのは仮面をかぶった金色の鎧の天使だった

ダルクモン

戦場の女神と呼ばれる下級天使型デジモン

必殺技はバテール・デ・アムール

「本当にごめんなさい、蜘蛛の怪物なんかと間違えたりした上にこんなにお世話になって」

「だからドクグモンだってば」

ダルクモンの案内で近くの集落まで来た、そしてそこでは木の実をこちそうしてもらっていた

「ところでこの集落は？けがをしたものが多いみたいですが」

「確かに、あそこのクマの人形とか剣道やってそうな子供とかロップモンの色違いとか怪我してるもんね」

「僕ベアモンだよ」

「子供じゃないもんコテモンだもん」

「ロップモンじゃないよ、テリアモンだよ」

「ここは戦いで親を失った子供たちや、負傷した兵士たちを匿う集落です」

「でもダルクモンは怪我してないよね、あっちの方にたくさんいる栗とかも」

「あれはイガモンだ」

イガモン

隠密行動を得意とする忍びのデジモン

必殺技はイガ流手裏剣投げ

「私やあの者たちは、ここにいる負傷者や孤児を守るためにあえて戦線から外れた者たちです」

「つまり、ダルクモン達はこの子たちを守るために……」

「ちよっと待ってくれ、だとするとまさかこの食べ物」

「我々の食糧です」

「……………」

結局けが人の手当てを手伝うこととなった、ダルクモンは遠慮するなど言ってくれたが貴重な食料を分けてもらった以上働かないわけにはいかない

「よく見ると怪我したイガモンもいるのね」

「ああ、我々はもともと戦士だったのだ、このせかいをまもるためのな」

「どういうこと?」

「あとでダルクモンに聞いてみようぜ」

「だめだ!」

治療が終わったのちダルクモンを尋ねたところダルクモンの部屋を見張ってたイガモンに止められた

「なんでよ」

「ダルクモンさまは今……………」

「……………」

「寝ておられる」

イガモンのこの言葉で三人と三匹はこけてしまった

「早!ついさつき日が沈んだばかりよ!」

「そうか、ダルクモンは天使型、夜はあまり活動できないということか」

「まあ、そのドルモンの言う通りなのだが、それに加えダルクモンさまは疲れておられる、いつもはお休みになるのはもう少し遅い」「どういうことだ?」

「今朝早くアスタモンの配下のドクグモンがこの集落を襲撃したのだ、幸い死者は出なかったのだが、我々の仲間のイガモンが数名、負傷した」

「ドクグモン、ドクグモン、どっかで聞いたような」

「ほら、昼間倒した怪物蜘蛛の名前よ」

「なんだと！あのドクグモンを倒したというのか！しかし、見たところお前たちは成長期ばかり、成熟期の我々が束になっても倒せなかったというのに」

「悪かったな、成長期で」

「成長期ってなんだ？」

その言葉にイガモン、ドルモン、パタモン、ロップモンはこけてしまった

「信じられん、このようなものたちがあのドクグモンを倒したなど」

「そういえばまだ話してなかったか」

「仕方ないよ、あのぬいぐるみの女の子が説明してくれると思ってたもん」

その後しばらくイガモンは「信じられん」と、錯乱していたが、ふと三人の手首にあるものに気付く

「それは！まさかD・ウォッチ！」

「ん？なんだお前？これ知ってたの？」

「それではまさかこの者たち………わかった、少し待っている、ダルクモンさまを起こしてくる」

「いいの？」

「普段は朝お目ざめになるのを待つのだが、今回ばかりは仕方がない、D・ウォッチについてはダルクモンさまに聞いてくれ」

しばらくしてイガモンはダルクモンを引き連れて出てきた

「どうぞお入りください、事情はイガモンに聞きました」

「デジモンたちは進化することで姿を変えその力を増すのです、下から幼年期、成長期、成熟期」

「そうか、これから出た門は、その進化をもたらす」

卓がD・ウォッチを取り出すと、ダルクモンはおもむろに立ち上が

り引き出しの中を探りだした

「そして、この世界には、時を刻み、進化をもたらす門を開く伝説のアイテムに導かれし者、戦乱を終結させ、平和へと導く門となる、という伝承が残されています、そしてこれが」

ダルクモンは引き出しから一つの石板を取り出し、三人と三匹の前に置いた

「その、アイテムです」

そしてその石板には、D・ウォッチらしき絵が刻まれていた

GATE：2デジタルワールド（後書き）

はい、中途半端な形で第2話終了です

今回少し長くなったかも

今回から（前回も？）ギャグが多くなると思います
どうか気長に見守ってくださいとお願いです

GATE：3強襲（前書き）

はい、前回バトルはありませんでしたが
今回はバトル有りです
それではどうぞ

GATE：3 強襲

「何、ドクグモンが倒された」

「は、どうやらそのようです」

「そうか………哀しきことだ、ドクグモンから最後に連絡のあった地域にデビドラモン達を送り込め」

「では、私も出向いてまいります」

そう言っただち上がったのはまさに悪魔、黒いからだど骨だけに見える漆黒のツバサ

デビモン

凶悪で残忍な墮天使型デジモン

必殺技はデスクロウ

「必ずや、ドクグモンの敵取って見せましょう」

そう言っただデビモンは姿を消した

その日の朝

「本当にごめんダルクモン、食糧まで分けてもらって」

そう言っただ背負った袋を見せる

「いえいえ、それと、D・ウオッチは心を一つにすることで、新たな力を生み出すと聞いています、あなた方の旅に幸あることを、またいつか会いましょう」

ダルクモン達と別れしばらく森の中を歩いていた

拓馬はD・ウオッチを眺めながら歩いている

「心を一つに………か」

するとあたりが急に暗くなり、たくさんの飛行物体が現れた

デビドラモン

複眼の悪魔と呼ばれる邪竜型の凶暴なデジモン
必殺技はクリムゾンネイル

「どうも、あなた方がドクゲモンを倒した方々ですね」

「なんだあいつ？」

「それではあなたたちの首、アスタモン様のもとへ持ち帰らせていただきます」

「そうはいくか、ドルモン！」

「パタモン！」

「ロツプモン！」

「『『ゲートオープン』』」

G A T E O P E N
E v o l u t i o n

「ドルモン進化」

「パタモン進化」

「ロツプモン進化」

三匹がそれぞれ門をくぐり、進化を遂げた

「ドルガモン」

「エンジエモン」

「トウルイエモン」

「パワーメタル」

ドルガモンが放った鉄球がまっすぐデビモンに向かっていくが、デビドラモンがそれを防ぐ

「デスクロウ」

すかさずデビモンがドルガモンを切りつける

「巖兎烈斗」

トウルイエモンが2、3体のデビドラモンを倒し、消滅させるがその数は減らず、反撃にあう

「ぐあ」

「愚かな、その程度の力で我らのような軍勢を相手にできると、その首もらったあ！」

デビモンが拓馬に襲いかかる

「拓馬！くそっ」

慌ててドルガモンが戻るが、その前にデビモンが吹っ飛び、拓馬の前には白い猫が一匹

テイルモン

尻尾にホーリーリングを宿した聖獣型のデジモンでかわいい見た目に合わずかなり強い

必殺技は猫パンチ

「なんなんだよお前？」

拓馬にそう聞かれてテイルモンは拓馬の体によじ登ると、軽くD・ウオッチについたスイッチの一つを押す、するとテイルモンのデータが出てきた

「これってこんな機能もあったのか」

するとデビドラモンの一匹が拓馬のほうに飛んできた

「猫パンチ！」

そこへまたテイルモンが殴りかかり、デビドラモンは消滅した

「キャッツアイ！」

更にテイルモンは目を光らせ次々デビドラモンの動きを止めていく
「いまよ、とどめを」

テイルモンはそれだけ言って森の中へ行ってしまった

「パワーメタル」

「巖兎烈斗」

「ヘブンスナックル」

数十分の戦いのすえ何とかデビドラモンを全滅させることに成功した拓馬たち

「つ、疲れた」

「もうだめ」

「……………」

三人と三匹は完全にはてていた、その一方で

「……………」

あのぬいぐるみの女の子が木陰から三人を見つめ、去って行った

「そつえばデビモンはどうした？いつの間にかいなかったけど」

「逃げたんじゃない？」

G A T E : 3 強襲 (後書き)

以上、第三話でした

今回前回と比べて短いかも

たまに長かったり短かったりするかもしれないのでご了承承願います

GATE：4兆し（前書き）

はい、前回いつの間にかいなくなってたあいつとの再戦です
それではぶっぞ

GATE：4兆し

デビドラモンの軍団を退けたのち、しばらく歩きだしていると村が見えてきた

「よかつたあ、野宿しないで済みそう」

しかし、町に着いてからある問題が露呈

「お金持っていない」

一応人間界のお金は持つてるが、この世界では使えない
実際この世界の貨幣をダルクモンに見せてもらったが、拓馬たちが持つてるのとは全く違うものだった
というわけで

「まさかこの年でアルバイトすることになるなんてね」

たまたま出会ったバーガモンのお店でお手伝いをしていた

「愚痴こぼしても仕方がない、一生懸命働こうじゃないか」

ロップモンがそっぴいながらパンズを上につけてハンバーガーを完成させる

「ふう」

ゴミの入ったバケツを店の外に運び出す拓馬、ふと、町の方に目を向けると

「君は……………ぬいぐるみの女の子!？」

いつぞやのぬいぐるみの女の子が立っていた

「このままではだめ……………今のあなたたちでは……………アスタモンに勝てない」

「アスタモン?アスタモンって……………まてよ」

そのデジモンに直接会ったわけではないが、ドクゲモンやイガモンがその名前を口にしていた

「ってか！君は何者なんだ？このD・ウオッチのこととかなんかいろいろ知ってるし」

「心を一つにするの……そうすれば……」

「ちょ！………いっちゃった、まあいつか、しかし心を一つに、か………確かダルクモンも似たようなこと言ってたな、なんだっけ？さらなるどうしたらこうたらとか、そういうは今」

拓馬は思い出した、あの少女が長袖の服を着ているから前回はわからなかったが、風で彼女の服の裾が揺れた際、見えたのだ、桃色のD・ウオッチが

「あの子は一体……」

その夜、バーガモンが入れてくれたコーヒーを飲みながら拓馬はずっとあの少女のことを考えていた

「ん〜」

「おい拓馬、砂糖入れすぎだぞ、何考え込んでるんだ？」

余談、バーガモンの店の砂糖はカップに入ってます

「ああ、ちよっと、そろそろ飲まないと冷めちゃうかな………って甘！」

そりゃそうだ：b y卓以下二人と4匹

翌日、バーガモンにバイト代ももらえなし無事旅を続行する拓馬たちするところもりのようなものが空を覆った

「なんだこいつら？そうだ、この間テイルモンが使ってた機能で」

イビルモン

小悪魔型の好戦的なデジモンで悪夢を見せる力持つ

必殺技はナイトメアショック

「ようやく見つけましたよ」

「『デビモン！』『』」

「やっぱり逃げ延びていたのか」

「ええ、デビドラモンを倒されたおかげでアスタモン様に大目玉を
くらいしましたが」

「またその名前か……………」

「……ゲートオープン」「」

G A T E O P E N
E v o l u t i o n

「ドルモン進化」

「パタモン進化」

「ロップモン進化」

もはやおなじみなので説明は今後割愛させていただきます

「ドルガモン」

「エンジエモン」

「トゥルイエモン」

「ヘブンズナツクル」

イビルモンを数体倒すも、デビモンにその攻撃は届かない

「デスクロウ！」

「グア」

「くっ」

デビモンがすかさず放った一撃はエンジエモンだけでなくトゥルイ
エモンにまで当たった

「パワーメタル」

「おっと」

すかさずドルガモンが放った一撃をデビモンはなんとイビルモンを
使い防いだ

「な！おまえ」

「フ、デスクロウ！」

「手こずっているようね」

木陰から再びぬいぐるみの女の子が覗いていた

「手を貸すかしら？」

女の子が誰かに話しかけるようなしぐさを見せるが、彼女のそばには誰の姿がない

「いや、案外面白いことになるかも」

すると”何か”が彼女にこたえた、しかしやはり誰の姿もない

最後のイビルモンを倒すがドルガモンが背中を切られドルモンに戻ってしまう

パタモン、ロップモンもそばに転がっている

「フ、思ったより容易いものだ」

「待て、デビモン」

ドルモンが立ち上がるも、やはりその脚はおぼつかない

「俺はお前を許さない、仲間を平気で盾にするお前を」

「俺もだ、デビモン、お前だけは許さない、お前だけは」

「俺達が、絶対に倒す」

二人がそう叫ぶとD・ウォッチが再び輝いた

「ゲートオープン」

なんと本日二度目の進化

「ドルモン進化」

ドルモンが再度蒼いの門くぐる

「ドルガモン」

再度ドルガモンに進化、しかしながらその体は輝いていた

「馬鹿な！この輝きは………！」

「喰らえ！パワーメタル！」

いつもより鋭く、そして早く、鉄球がデビモンを貫いた

「兆し”が見えた………？」

「ほら、面白いことになった」

果たして”兆し”とは何だろうか

「あー、あちこち怪我が酷い」

「ダルクモンの救援部隊が通りかからないかなあ」

「ムリだろ、そう簡単に会えるもんじゃないって」

そのことを拓馬たちはまだ知らずにいた

GATE：4兆し（後書き）

はい、第4話終了

ぬいぐるみの女の子の正体については今後を楽しみにしててください
今後の拓馬たちは一体どうなるんでしょう

D・ウオッチも輝いてますしもしかしたら………おっと、この先
は伏せておきますが

勘のいい人はもしかしたらわかっちゃうかも

G A T E : 5 覚 醒 (前 書 き)

今回はいよいよアスタモンが登場
展開が急加速してきます

GATE：5 覚醒

ある集落のテントのあちこちから火が燃え上がりデジモンたちが逃げ惑っていた

「くっ」

そして、一体のデジモンが腕を押さえながらおぼつかない足取りで歩いている

「逃がしませんよ」

そのデジモン……ダルクモンの目の前に仮面をかぶったスーツの男性のようなデジモンが立ちふさがる

アスタモン

敵に対する残虐性と味方に対する慈愛を持ち合わせる闇のデジモン必殺技はヘルファイア

「いい加減教えてくれませんか、私の可愛い部下をあやめた者たちのことを」

「誰が七大魔王の配下に教えるものですか」

そうとうとダルクモンは剣を取り出しアスタモンに向かっていく

「バテーム・デ・アムール!!」

「ふ」

しかしダルクモンの攻撃は武器であるマシンガンを使わず片手で受け止められた

「手負いの……それも成熟期程度のデジモンでは私を倒すことはできませんよ」

そう言つてアスタモンはもう片方の手でマシンガンを構える

「ヘルファイア」

そしてマシンガンから放たれた弾丸がすべてダルクモンの体へと直撃する

「あ……………」

ダルクモンはその勢いで吹き飛ばされ地面へと上向きに倒れ込んだ

「最後のチャンスです、このまま命を落とすか、私の部下をあやめた者たちについて話すか、どちらかを選びなさい」

そっぴいなながらアスタモンは倒れたダルクモンの額に銃口を向けた

「誰が……………あなたに……………」

「そうですか」

そしてアスタモンはマシンガンの引き金を引いた

「あああああああ」

そしてダルクモンの断末魔の叫びがあがり、彼女の体は粒子となり消滅した

「仕方がありません、自分で探しますか」

そっぴいな残しアスタモンは去って行った

炎で燃え盛る集落には何も……………いや、一つだけ、何者かの人影が「なんとということだ、あの者たちに知らせなければ」

そっぴいな言って影のデジモンも何処かへ行っってしまった

一方拓馬たちは草原を歩いていた

「なんだよ、ここは、歩いてもあるいても草、草、草」

「もっぴいや〜」

「しかし、このD・ウォッチ、本当にいくつ機能があるんだ」

何やらD・ウォッチから地図のようなものが浮き出ている

これもD・ウォッチの機能の一つのようだ

すると突然D・ウォッチから「ピー」という警告音のようなものがあり、地図に赤い印が現れた

「なんだ？この印」

「この近くだな、行ってみよう」

しばらく草原を歩いていると魔法使いの格好をしたデジモンが石の

上に座っていた

「お待ちしてありました、みなさん」

ウィザーモン

炎と大地の魔術を操る魔人型デジモン

必殺技はサンダークラウド

「なんなんだお前」

「私はウィザーモン、皆さんにお伝えしたいことがあった馳せ参じました」

「なんなんだ？」

「ダルクモンさまの救援部隊が……壊滅されました」

「なんですって！じゃあダルクモンは」

「残念ながら敵の手にかかり……集落にいた他のデジモンもすべて」

「そんな……ダルクモンが……一体誰が！」

「アスタモンです、部下を次々殺されたやつは、自分の部下を殺した者たちが、ダルクモンさまと接触されたことを突き止め……」

「じゃあ、ダルクモンはおれたちの所為で……」

「おそらくそういうことになるんじゃないですかね」

ウィザーモンと拓馬たちが話していると、なんとアスタモンが割り込んだ

「誰だお前は」

「やつがアスタモンです！」

「なんですって、じゃあこいつがダルクモンを……」

「そういうことになりますね、ですが誰が死のうと関係のないこと、どの道あの舞台はつぶすつもりでしたし、手間が省けて感謝しますよ、おまけに……」

アスタモンは三人の手首を見る

「伝説のD・ウォッチを持つ人間の子供、クラモンでその魔術師の

後をつけてきて正解でしたね」

「クラモン………そこか！」

今更背後にいたクラモンに気付きつえから出した雷撃で撃ち落とす
ウィザーモン、しかし時すでに遅し、拓馬たちはもうアスタモンに
見つかってしまった

「……ゲートオープン」

すかさず三人は自分のデジモンを進化させ、アスタモンに立ち向か
おうとするが

「まさか！いまだ成熟期のままなのですか？」

「え？デジモンってまだ進化するの？」

「先ほど私が撃ち落としたのは幼年期のクラモン、そしてあなたた
ちのパートナーであるそのデジモンは元は成長期、私やあなた方の
今の姿が成熟期、ダルクモンさまもこれに当たります」

敵前ながらウィザーモンは説明を始める

「そしてあのアスタモンは………完全体！成熟期をはるかに上回る
種族です」

「完全体………そんな」

「関係ないさ、行け！ドルガモン」

「パワーメタル」

ウィザーモンの説明を聞いてなお突っ込んでいくドルガモンだが彼
が打ち出した鉄球はアスタモンの指一本で受け止められてしまう

「弱い、今のあなたたちを倒すなど、集落にいた多数のデジモンを
殺すよりたやすい」

そう言つて鉄球を関係のない方向へ飛ばしたアスタモンはマシンガ
ンを構える

「ヘルファイア」

そして彼のマシンガンから無数の光弾が放たれドルガモン達へと降
り注ぐ

「うわああー！」

しかし、拓馬たちは無傷であった

ウィザーモンが彼らをかばいすべての光弾を受け止めたからだ

「ウィザーモン！」

「どうして！私たち今会ったばかりなのに！」

「私も信じたいのです、ダルクモンさまが最期まで信じていた、あなたたちの可能性を」

そう最期に残し、ウィザーモンの体が粒子となって消滅した

「くはははは！自ら命を捨てるとは、なんと愚かな」

「黙れよ」

ウィザーモンの死をあざ笑うアスタモンに対し拓馬が言い放つ

ドルグレモン達もアスタモンを一転に睨み続けた

「あつたばかりの私たちにやさしくしてくれたダルクモンを」

「僕たちを信じて出会ったばかりなのに守ってくれたウィザーモンを」

「馬鹿にすることだけは！絶対に許さない！」

6人の心が一つになった

すると3人のD・ウォッチが強く輝いた

「パーフェクトゲート、オープン」

Perfect GATE open

Evolution

「ドルガモン進化」

「エンジエモン進化」

「トウライエモン進化」

ドルガモンが跳躍し、D・ウォッチから新たなゲートが放たれた
そしてドルガモンがそのゲートをくぐり光の球体に包まれていた
更にその球体が割れ、中から赤い竜のようなデジモンが現れた

「ドルグレモン！」

同じようにエンジェモン、トウルイエモンもその新たなゲートをくぐりぬけた

そしてエンジェモンは更に立派な天使へ

トウルイエモンは大きな兎の巨人へと進化を遂げた

「ホーリーエンジェモン」

「アンティラモン」

ここに三体の完全体のデジモンが進化を遂げ、現れたのだった

GATE：5覚醒（後書き）

はい、第5話終了です

完全体になるの早くね？という突っ込みはなしでお願いします

クロスウォーズも似たようなもんですし（X-3のことか）

今回いきなりシリアスになり、ダルクモン、ウィザーモンの二名がお亡くなりになりました

集落のデジモンはアスタモンに皆殺しにされたのでベアモンやイガモンも殺されております

果たしてこの先完全体の三体がどんな戦いを見せるのか
皆さんお待ちいただけると幸いです

GATE：6 決意（前書き）

前回完全体へと進化を遂げました

因みにこの話、いろいろな都合で何度か書きなおしを喰らっております

一番ひどいのは描きかけの状態で寝てたらプログラムの更新とかで寝てる間にパソコンが再起動してた時ですね

GATE：6 決意

とうとう完全体に進化を遂げた拓馬たち

「凄い」

ドルグレモン

最後の敵の異名を持つ完全体の超大型獣竜型デジモン
必殺技はメタルメテオ

ホーリーエンジエモン

8枚の巨大な羽を有する完全体の大天使型デジモン
必殺技はヘブンスゲート

アンティラモン

聖なる力に使えるとされている完全体の聖獣型デジモン
必殺技はアシパトラヴァーナ

「これは面白い、見せてもらいましょうか！完全体の力を」

そう言つてアスタモンはマシンガンを構える、ダルクモンやウィザ
ーモンを葬つた技だ

「喰らいなさい！ヘルファイア！」

アスタモンのマシンガンから無数の光弾が放たれドルグレモン達に
向かっていく

するとアンティラモンが弾丸に向かっていく

「アシパトラヴァーナ」

アンティラモンが弾丸を切り裂き、ホーリーエンジエモンが追撃に
かかる

「エクスキャリバー」

「ちい」

マシンガンで防ぎながら距離をとるアスタモン

「ヘルファイア！」

ホーリーエンジェモンとアンティラモンがその攻撃を受け成長期に戻ってしまう

「ロップモン！」

「大丈夫かパタモン」

しかしその中にドルグレモンの姿はなかった

「やつはどこに………」

するとドルグレモンを見つけたアスタモン、上だ

「ダルクモン達の敵だ！メタルメテオ！」

鉄球の嵐が降り注ぎアスタモンに迫る

「甘い！ヘルファイア」

しかし鉄球の隙間を縫ってアスタモンの弾丸も飛んできた

「ぐあああ」

「ちい」

両者ともお互いの技をまともに受けた

「ドルモン！」

成長期に戻ってしまったドルモンに対しアスタモンは傷を負ってはいるものの、持ちこたえていたが、割と傷は深いようだ

「この勝負、あなた方に預けます」

「あ！まで！」

結局アスタモンは逃亡してしまった

「いかがですか、アスタモンさま」

アスタモンの屋敷でカプセルみたいな形をしたデジモンが彼の入ったカプセルを操作していた

ナノモン

あらゆるコンピューターをその優れた技術で破壊する完全体のデジ

モン
必殺技はプラグボム

「うむ、心地よい、ナノモンよ、私はしばらくここで傷をいやす、あとのことはお前に任せるぞ」

「承知しました」

そう言つてアスタモンは眠りに就いた

「さて、どの兵士を使いやつらを葬るかのぉ」

そう言つて情報データらしきものを引き出し始めるナノモン

「ま、最初はこんなところかのぉ」

一方傷ついたドルモン達を背負いながら旅を続ける拓馬たち

「ドルモン、大丈夫か？」

「ああ、もう大丈夫だ、いてて」

「手酷くやられたものだな」

「私たち、アスタモンに勝てるのかな」

すると三人の上を何か巨大のものが飛んで行つた

「なんだ!？」

するとその巨大なものが旋回して三人の前に降り立つた

巨大なインディアン風の鳥人だ

ガルダモン

大空を自在に舞つことのできる翼と巨大な鉤爪を持つ完全体の鳥人

型デジモン

必殺技はシャドーウイング

「そうですか、アスタモンに」

現在ドルモン達の治療を村のピヨモン達に任せガルダモンの屋敷で休ませてもらっている

しかし拓馬たちの表情は沈んでいた

「どうしたのですか」

「俺達、こんなところにいるいいのかな」

「……………」

「怖い私たち！だって……………」

「ダルクモンの部隊のことですね」

「ガルダモン……………知ってるのか」

「彼女はもともと私と同じ部隊にいました、私の戦友です」

「じゃあ……………！」

「しかしあなた方を責めるつもりはありません、たとえあなた方にあつていなくても、アスタモンはしらみつぶしに探すため、彼女たちに手をかけていたことでしょう」

「しかし……………」

「あなた方と出会ったあとに彼女から連絡をもらいました、きっとこの世界を平和にしてくれると信じて、ですから私も、あなた方を信じたいのです」

「そういえば……………」

拓馬は思い出していた、ウィザーモンの最期の言葉を

（「私も信じたいのです、ダルクモンさまが最期まで信じていた、あなたたちの可能性を」）

「……………いつまでもうじうじしてたらダルクモンに笑われちゃうな」

「ようやく笑ってくれましたね」

「ガルダモンさま！大変です！」

ようやく落ち着いてお茶を飲もうとしたところ一匹のホークモンが駆け込んできた

おかげでお茶を吹いてしまった拓馬だった

二体の鳥デジモンが敵に向かっていった

バードラモン

燃え盛る炎を身に纏う巨鳥型デジモン

必殺技はメテオウイング

アクイラモン

「砂漠の巨鷲」と呼ばれる頭部に二本の角を生やした巨鳥型デジモン
必殺技はプラストレーザー

「つつしっし、お前らに用はない」

フアントモン

巨大な鎖鎌を持った死神のような完全体のデジモン
必殺技はソウルチョッパー

「たとえ成熟期の我々でも少なからず抵抗して見せる、メテオウイング」

「プラストレーザー」

各々の必殺技で対抗するも

「ソウルチョッパー」

フアントモンの必殺技でかき消され、さらにバードラモンとアクイラモンも吹っ飛ばされてしまう

「つつしっし、アスタモンさまとの戦いで弱ってる今ならあの人間どもを倒せる、安心しろ、お前たちもすぐ楽にしてやる」

「シャドーウイング」

大きな鳥の形をした炎がフアントモンに襲いかかる

「彼らには手出しをさせません」

ガルダモンがフアントモンの前に立ちふさがった

「ガルダモンさまがフアントモンを食い止めてるうちに、手当てを急ぎますよ」

妖精のようなデジモンと2体のサボテンのようなデジモンがドルモン達の手当てをしていた

リリモン

美しく咲いた花弁から生まれた完全体の妖精型デジモン
必殺技はフラウカノン

トゲモン

巨大なサボテンの姿をした植物型デジモン
必殺技はチクチクバンバン

「頼むリリモン、ガルダモンを助けていんだ」

「任せてください」

ドルモン達に治療用の薬を塗ってさらに水薬をのませるリリモン達
「がんばってくれ、ドルモン」

GATE：6 決意（後書き）

ドルモン達が完全体になった途端に完全体が登場しまくりました
ナノモン、ファントモン、ガルダモンにリリモン

今回だけでなんと4体の完全体が初登場

ぶっちゃけ前者の三体だけにするつもりだったんですが（妖精型の別のデジモンを他で出す予定もあったので）

ほかに治療で思いつくデジモンが居なかったのでリリモンも出しました

果たしてドルモン達の治療は間に合うのでしょうか

次回を楽しみにしていただけると………幸いです

GATE：7 出発（前書き）

はい、前はリリモンに治療受けてるところで終わりましたが
果たして間に合うのでしょうか

GATE：7 出発

「シャドーウイング！」

「ソウルチョッパー！」

ガルダモンが巻き起こした風がファントモンのかまで切り裂かれた
「くっ」

「どうやら貴様、ブランクがあるようだな、長らく戦線を離れてい
たと聞く」

「……………私は、戦乱の世で仲間がしんでいくのを見るより、ここ
デジモンたちを守ることを選んだ、そして私は、この者たちを守る
ため！命をかける」

ガルダモンの周りに再び風が集まる

「シャドー……………」

「ソウルチョッパー！」

ガルダモンが技を放とうとした時、ファントモンの攻撃で背中を切
られた

だが、ファントモンはまだ目の前にいる

「誰がひとりだといった」

「我々は……………」

「ファントモン三兄弟！」

「があ（まさか三体だったとは……………油断しました）」

「とどめだ」

「…………トリプルソウル……………」

「まてえ！」

「どうやら間に合ったみたいね」

「ガルダモン、君はゆっくり休んでくれ」

「……………そうします」

そう言ってガルダモンは戻って行った、アクイラモンとバードラモ

ンをつかんで

「行くぜ、みんな」

「『パーフェクトゲート！オープン』」

P e r f e c t G A T E o p e n

E v o l u t i o n

「ドルモン進化」

二つの門が現れまずドルモンが二つ目の門をくぐりドルガモンになる
そして二つ目の門をくぐりドルグレモンとなった

「ドルグレモン」

「パタモン進化」

「ロップモン進化」

残りの二人も同じように門をくぐる

「ホーリーエンジエモン」

「アンティラモン」

「ソウルチョッパー」

「アシパトラヴァナ」

アンティラモンとファントモンのうち一匹が斬り合いをしている

「ブラッディタワー！」

ドルグレモンが地中から赤い光の塔を出現させ一匹を串刺しにした
更にアンティラモンも斬り合いに勝利

「ヘブンスゲート」

ホーリーエンジエモンの作りだしたモンにファントモンの最後の一
匹が吸い込まれすべて倒した

「まあ、ファントモンではこの程度か」

そう言つてナノモンはこつそり放つた監視カメラの電源を切つた

「アスタモンの屋敷はあの山を越えた先にあります、どうかがんばつて」

「あんな小さな山すぐ越えて見せるぜ」

「いえ、あれは遠くにあるので小さく見えるだけです」

「かなりかかりそうだな」

「それでも行くしかないわよ」

「ありがとな、ガルダモン」

こうして彼らは出発した、アスタモンを倒すために
が……………

「もう、また迷つちやつたじゃない」

「こんなんで大丈夫なのだろうか」

しばらく放浪しているとロップモンが耳を逆立てた

「どうしたの？ロップモン」

「何かいる」

すると8匹の蛇……………いや、8つに分かれた頭を持つ巨大な蛇が現れた

オロチモン

8本の頭部を持つ完全体の巨大な魔竜型デジモン
必殺技はアメノムラクモ

「完全体か」

「アスタモンさまの為、お前たちを倒す」

「こいつもアスタモンの手下なのか」

「行くぜ、ドルモン」

本日二度目につき進化シーン省略

「フオッフオッフオ、オロチモンの秘密に、果たしてやつらは気づくかのお」

また盗み見ていたナノモンだった

「アメノムラクモ」

オロチモンの尻尾から放たれた一撃を三人はかわす

「アシパトラヴァナ」

そしてアンティラモンがオロチモンの首を一つ消滅させるが

「くそ、また生えてきた」

「トカゲかよ」

「どっしよっ」

「何か秘密があるはずだ、あいつの不死身の秘密が」
その時卓は気づいた

「そういえばあいつ、一つだけ首の色が違うな」

確かに銀色の首の中に一個黒い頭がある

「……………なんであんなわかりやすいのきづかなかったんだろっ」

というわけで狙いを絞った拓馬たちだが

「メタルメテオ」

「酒ブレス」

思ったより手ごわく、なかなか攻撃を与えられない

「エクスキャリバー」

「アメノムラクモ」

ホーリーエンジェモンが現在オロチモンの尻尾と格闘中である

「くそ、何とかあいつの黒い首にダメージを」

するところからか光が放たれた

「なんだこの光は……体が動かん」

光の発信源は以前のテイルモンだった

尻尾のホーリーリングが光っている

「いまだ！ドルグレモン」

「ブラッディータワー！」

ドルグレモンがそのすきにオロチモンの本体を赤き光の塔で貫いた

「おのれ、あのテイルモンは何者なのだ！」

その一方で悔しがるナノモンだった

「一体なんだつたんだろうな、あのテイルモン」

「ホーリーリングには闇を浄化する力があるって、D・ウォッチの
図鑑には書いてあるけど」

「いくらなんでも強力すぎる、オロチモンの動きを完ぺきに封じる
とは」

「今のままではだめ……完全体の力を使いこなしていない」

そう呟き、彼らを見つめているぬいぐるみの女の子

果たして彼女は何者なのだろうか

GATE：7 出発（後書き）

はい、今回は無事フロントモンとオロチモンを撃破しました
余談ですが今まで敵とした登場したデジモンにはある共通点があり
ます

わかつたらぜひ感想で送ってきてください

GATE：8足りないもの（前書き）

さあ、前回テイルモンの援護のおかげでかろうじてオロチモンを倒したわけですが

今回はどんな相手になるんでしょうか

GATE：8 足りないもの

「おのれ……………こうなったらあのデジモンで葬ってくれる」
そう言っつてパソコンを操作するナノモン

砂漠の中を歩く拓馬たち

「熱い……………」

「ねえロップモン、次の町つてまだなの」

「ガルダモンにもらった地図が正しいなら明朝にはつくはずだ」

「明……………いくら野球やテニスで鍛えてるからといつてもさすがにきつい」

「だいじょうぶ？」

などと話ながら歩いてしていると戦闘のドルモンが何かに躓いた

「つて、なんだこれ」

すると遠くから汽笛のような音が

「ありがとうロコモン、乗せてもらっちゃって」

ドルモンが躓いたのはロコモンの線路だった

ロコモン

走り続けることが生きがいという完全体のマシン型デジモン
必殺技はスモールボム

「構わないさ、ちょうどおれも町にいくところだったし」
意外とやさしい奴だ、どこぞの劇場版とは大違い

「しかし伝説のD・ウォッチを持った人間とは驚きだぜ」

「ねえロコモン、この先はどんな街なの？」

「ああ、この先は俺達マシーン型デジモンの町さ」

「さ、ついたぜ」

「ありがとうロコモン」

駅で降りしてもらった拓馬たち

「この先は線路がないので俺は手助けできない、健闘を祈るぜ」
そう言っつてロコモンはまたどこかへ走って行った

「すげー、本当にロボットみたいなのばかりだ」

すると突然空に三体のデジモンが現れた

「あれは！」

メガドラモン

竜型サイボーグデジモンの中で最強最悪のパワーを誇るといわれている完全体の暗黒竜デジモン

必殺技はジエノサイドアタック

ギガドラモン

闇のように黒い体をした完全体のサイボーグ型デジモン
必殺技はジエノサイドギア

「見つけたぜ、アスタモンさまに逆らう者たち、俺達三兄弟の力見せてやる」

「いや、三兄弟って言うか、一匹違うの交ってないか？」

確かに他の二体はメガドラモンなのに一匹ギガドラモンが混じってる
「どうでもいいだろ」

Perfect GATE open
Evolution

「ドルモン進化」

二つの門が現れまずドルモンが一つ目の門をくぐりドルガモンになる

そして二つ目の門をくぐりドルグレモンとなった
「ドルグレモン」

「パタモン進化」

「ロップモン進化」

残りの二人も同じように門をくぐる

「ホーリーエンジェモン」

「アンティラモン」

進化シーン使い回しですいません

「ジエノサイドギア」

「メタルメテオ」

ミサイルと鋼鉄の隕石が激突

「エクスキャリバー」

「ジエノサイドアタック」

「アシパトラヴァナ」

若干押されぎみだ

「やはりだめ、今の彼らでは……………」

「どうする」

建物の影から彼らの様子を見ているぬいぐるみの女の子

「……………できればあねはまだ使いたくない、少し荒っぽいけど」

「……………大丈夫？」

「……………タイミングを見ましょう」

やはり一人だけだ、しかし彼女は誰かと相談してるようす

「ジエノサイドギア」

ギガドラモンのミサイル攻撃をまともに食らったドルグレモン、流れ弾が少し拓馬の方に飛んでくる

すると拓馬に当たる前に流れ弾が誰かに当たった

ぬいぐるみの女の子が身をていして拓馬をかばったのだ

「おい！大丈夫かよ」

「今の……ままでは……だめ、力を……合わせて」

そう言っただけで彼女は気を失った

「力を……合わせる」

完全に進化してこう気付かなかったが

自分たちは三人で戦っている

「それを俺達は一人一殺で戦ってばかり、パワーでメガドラモン達に負けていても……コンビネーションなら……ってあれえ!？」

いつの間にかぬいぐるみの女の子は何処かへ行ってしまった

「やってみるか、コンビネーション……それにしてもあの子ども行っただけ？」

「それでいい……」

「やっぱり少し無茶だったんじゃない」

「……もう見守る必要もないわ……行きましょう……モン」
そう言っただけで彼女は何処かへ歩いて行った

「アシパトラヴァナ」

「エクスキャリバー」

アンティラモンがメガドラモンの攻撃を相殺してホーリーエンジェモンが腕の聖剣で切りつけた

これでメガドラモンは全滅だ

「馬鹿な、おのれ！最大最強の……」

そう言っただけでギガドラモンはパワーをためる

「ジエノサイドギア！」

「ヘブンスゲート」

だがその攻撃をホーリーエンジェモンは自らの技で別空間に飛ばした

「いまだ、ドルグレモン」

「メタルメテオ」

地上の二体に気を取られていたギガドラモンは上空のドルグレモンに気がつかず、その攻撃を受け倒された

「馬鹿な、あの少女何者………それに」

ナノモンは彼女が抱いている垂れ耳のぬいぐるみを拡大して映す

「これは………」

GATE：8足りないもの（後書き）

はい、第八話終了です

全員で戦う、ということを理解した拓馬たち

完全体になってから一人一殺の戦いばかりだったからなあ

GATE：9 到達（前書き）

いよいよアスタモンとの戦いも終盤が近づいてきました

GATE：9 到達

帽子をかぶった幽霊のようなデジモン達が拓馬たちめがけて飛んできた

ソウルモン

黒い帽子で自身の魔力を引き上げている
必殺技はヘルズハンド

「パワーメタル」

「ヘブンズナックル」

「巖兔烈斗」

ソウルモンは完全体じゃないので久々の成熟期

「この山を越えればアスタモンの屋敷だって言うのに」

「さすがに警戒が厳重ね」

「こうなったら最後の手段だ」

そう言つて卓がD・ウォッチを構える

「パーフェクトゲートオープン」

Perfect GATE open

Evolution

「エンジェモン進化」

エンジェモンがゲートをくぐり完全体に進化した

「ホーリーエンジェモン」

「ってなんでホーリーエンジェモン？」

「こうするためだ！ホーリーエンジェモン」

「ヘブンズゲート」

ホーリーエンジェモンの開いた聖なる扉がソウルモンをすべて吸い
尽くした

「なるほど」

そのまま三人は完全体に進化した状態で上空から山越えを狙っていた
アンティラモン飛べるのか？という突っ込みは無しでお願いします

しばらく彼らが飛んでるとたくさんのデジモンが飛んできた、一体
はものすごい大きさだ

「屋敷へはいかせん！」

ワस्पモン

肩の推進器と背中スタビライザーにより上下前後左右とあらゆる
方向に急速に移動が可能

必殺技はターボスティングー

キャノンビーム

上部の巨大な武器コンテナから放つ一斉砲撃の弾幕で広範囲をカバ
ーする完全体のデジモン

必殺技はニトロスティングー

「こいつは完全体か」

「拓馬たちを乗せたままじゃ……………」

しかしワस्पモン軍団とキャノンビームは容赦なく攻撃してきた
ワस्पモンが弾膜を張ってきたのだ

「これじゃ近付けない」

更にキャノンビームが極太のレーザーを放ってきた

「うわあああああ」

「よーし、このまま始末しろ」

しかしキャノンビーモンが指示した途端周りのワスプモンが倒されていく

「何」

そして下の森にはぬいぐるみの女の子が、しかしいつも抱いてるぬいぐるみがない

「貴様がやったのか!？」

「この人たちには……………まだ見せられないけど……………今ならよさそうね」

「ほざけ、ニトロステインガー!」

「パーフェクトゲート」

普段は裾に隠れてわからない桃色のD・ウォッチを彼女が取り出した
「オープン」

そして彼女の周りを光が包んだ

「なんじゃ今のは」

キャノンビーモンを通じてみていたナノモンだったが今の光の後映像が途絶えた

そしてキャノンビーモンは何者かに倒されていた

「ば、馬鹿な……………なんだったのだ、今のデジモンは……………」
そう最期に残しキャノンビーモンは消滅した

「いてて、なんだったんだよあいつら」

「しかもいつの間にか全滅してるぞ」

「なにはともあれ、ここが……………」
目を覚ました拓馬たちは目の前の不気味な屋敷を見上げる

「アスタモンの屋敷」

三人は一斉に互いを見ると

「よし、いくぞ」

パートナーともども屋敷に突入した

「……………」

「どう思うっ？」

ぬいぐるみの女の子は木の陰に隠れていた

「しばらく様子を見るわ……………あの三人だけでアスタモンに勝てないようなら私も……………」

「そうだね……………いざとなったら“彼”に後を任せればいいし」

ぬいぐるみの女の子はその後たった一人で屋敷の中に入って行った
しかしそのことを拓馬たちは知らない

「ピコットダーツ！」

こうもり？が注射器を打ってきた

ピコデビモン

ずる賢い性格の成長期のデジモンだ

必殺技は

「ピコットダーツ」

「エアーション」

結局パタモンに撃ち落とされた

「ブレイジングアイス」

ロップモンが口から放った冷気でピコデビモンは完全に凍りついた

「メタルキャノン」

そしてドルモンのとどめの一撃で凍ったまま粒子となった

「よし、行くぞ」

「おのれえ」

「ナノモンさま、例のデジモンの準備整いました、いつでも出れます」

「そうか、ではいくぞ」

そう言ってナノモンは何処かへと歩いて行った

「時は近い……………」

そして部屋の奥では、アスタモンが目覚めようとしているのだった

GATE：9 到達（後書き）

はい、決戦の時は近いです

今回初めて単独でぬいぐるみの女の子が戦ったわけですが

果たして彼女のパートナーデジモンとは一体何者なのでしょうが

GATE：10 激闘（前書き）

いよいよナノモンが動きます

しかしキャノンビーモンに負けてるのにアスタモンを倒すことはできるんでしょうか（書いたのお前！）

GATE：10 激闘

現在拓馬たちは

「パワーメタル」

「海鳴墨銃」

狭い通路で敵と交戦中

オクタモン

ネットの海底から拾ったデジ宝デジホウを体中にまとっている

必殺技は海鳴墨銃

「くっそー、こんな狭いところじゃ戦いにくいぜ」

苦戦中のドルガモン達

完全体になって一気に決めてもいいがこうも狭いとそういうわけにもいかない

「猫パンチ」

するとここでテイルモンが乱入、オクタモンに拳を振るった

「今だ！ヘブンズナックル」

エンジエモンの攻撃を受け遠くに吹っ飛ばされたオクタモン

おそらく既に倒されているのだろう

「あれ？テイルモンは？」

「あ！またいなくなってる」

「一撃でオクタモンを倒した……もう、力を貸してもよさそうね」
ぬいぐるみの女の子がまたしても柱の陰からのぞいていた

しばらく拓馬たちがあるいていっているとでっかい広間に来た

「フオッフオッフオ、まさかここまでやるとは」

ナノモンがなんかロボットみたいなのに乗って現れた

メカノリモン

自ら行動することはできず常に他のデジモンが操縦しないと活動できない特異なデジモン

必殺技はトウインクルビーム

「だが貴様たちもここまでだ！行け！メタルティラノモン」

ナノモンが叫ぶとともにサイボーグのような黒い恐竜が現れた

メタルティラノモン

強化された体はどんな攻撃をも跳ね返しアゴの攻撃力は硬い武装も簡単に砕く

必殺技はヌークリアレーザー

「これだけ広ければ大丈夫だ、パーフェクトゲート！オープン」

「パーフェクトゲート！オープン」

Perfect GATE open
Evolution

「ドルモン進化」

二つの門が現れまずドルモンが二つ目の門をくぐりドルガモンになる
そして二つ目の門をくぐりドルグレモンとなった

「ドルグレモン」

「パタモン進化」

「ロップモン進化」

残りの二人も同じように門をくぐる

「ホーリーエンジェモン」

「アンティラモン」

毎度毎度使い回しですいません

「馬鹿め、たとえ完全体がいくらいようと、メタルティラノモンの敵ではないわ！」

そう言つてメカノリモンに乗りながら操作するナノモン
自分は戦わないのか？

メタルティラノモンが自慢の爪でアンティラモンを弾き飛ばした
「アンティラモン！」

「どうやらやつと言つてゐることは嘘じゃないようだな」

「こつなつたらコンビネーションだ」
ドルグレモンが上空に飛ぶ

「メタルメテオ」

鉄球の雨あられがメタルティラノモンに降り注ぐがものともしない
「エクスキャリバー」

更にホーリーエンジエモンが後ろから攻撃しても何ともないようだ
「アシパトラヴァナ」

すかさず繰り出したアンティラモンの追撃も全く通用しない

「くそ、どうすればいいんだ」

「ティルモン」

「……え？」

なんとティルモンが再び乱入
メタルティラノモンの頭にキックを決めた

「君は……！」

「ぬいぐるみの女の子！」

なんとティルモンが入口に戻り、そのティルモンの隣にぬいぐるみの女の子が

「そうか、そのティルモンは君のパートナーだったのか！」

「正確には、テイルモンじゃないわ」

そう女の子がつぶやくとテイルモンが退化して……………彼女がいつも抱いてるぬいぐるみに戻った

「あのぬいぐるみデジモンだったのか!？」

プロットモン

まだ幼いためその神聖的な力を発揮することができないでいる
必殺技はパピーハウリング

「行くわよ、プロットモン」

そう言つて彼女は裾をまくり、桃色のD・ウォッチを取り出す

「パーフェクトゲート、オープン」

「プロットモン進化」

プロットモンがゲートをくぐりテイルモンとなり
更にゲートをくぐって女性の天使に変わった

「エンジェウーモン」

エンジェウーモン

デジタルワールドの女神と呼ばれている完全体の大天使型デジモン
必殺技はホーリーアロー

「見せてあげる……………」

「え？」

「私たちの力……………」

果たしてエンジェウーモンの実力とは

GATE：10 激闘（後書き）

はい、というわけで今回ぬいぐるみの子のパートナーがプロットモンと判明しました

まあ前からちよくちよくテイルモンの状態でてるんで気づいてる人は気づいてたかもしれませんが

GATE：11 共闘（前書き）

はい、というわけで前回

ぬいぐるみことプロットモンがエンジェウーモンに進化したわけですが

果たして強敵メタルティラノモンを倒せるのでしょうか？

GATE：11 共闘

「なるほど、そのデジモンがキャノンビームを倒したというわけか」

「そういうことか！どうしてキャノンビーム達が居ないのかと思ったら」

今更かい

「行きなさい、エンジェウーモン」

エンジェウーモンがメタルティラノモンに接近

「ホーリーアロー」

指先から光の矢を放ちメタルティラノモンに当てた
少し効いてるようだが軽くひるんだ程度だった

「やはりだめか」

「ホーリーアロー」

しかしエンジェウーモンはそれでも攻撃を続けた
メタルティラノモンの眉間に立て続けに

「もしかして彼女は………拓馬」

卓は何かに気付き拓馬たちと相談を始める

「ええい、小癩な」

ナノモンはメカノリモンに乗りながら何かいじってる、すると

「メタルメテオ」

ドルグレモンの攻撃がメカノリモンを襲う

「どわあ」

「それでメタルティラノモンを操ってるんだろ」

「バレバレだ」

「どうせならもうちょっとわかりにくいようにしときなさいよ」
拓馬たちがやったのだ

ぬいぐるみの女の子がメタルティラノモンを引きつけてる間に無事
近づくことが出来た

すると何かが割れる音が、なんとメタルティラノモンの額が割れて
いた

「たとえ小さな力でも……同じ所に当てれば」

そしてメタルティラノモンが痛がつてる間にエンジエウーモンが大
技の構えに入る

「ヘブンスチャーム」

エンジエウーモンが広げた両手から放たれた光でメタルティラノモ
ンは後ろに吹っ飛び……

「わ！こっちにくるな！うわあああああああ！」

ナノモンをつぶして爆発した

「すっげー」

「エンジエウーモン強い！」

「ナノモン弱！」

エンジエウーモン含め完全体四体が成長期に戻った

「……………アスタモン……………この先」

そう言っただぬいぐるみの女の子は通路の先を指差すが

「その前に聞いていいか、君はいつたい何者なんだ」

卓が割って入った

「……………今はまだ、話せない……………でも……………」

そう言っただぬいぐるみの女の子がD・ウォッチから地図を取り出す

「この戦いが終わったら……………その場所で……………」

「そういえばこの時計そんな機能あったっけ」

「あ、なんかマーキングされた」

どうやらD・ウォッチに地図のデータが転送されたよう

「そう、今はまだ……………」

そう呟いてぬいぐるみの女の子が通路を歩き始める

「あ！ちよ、待てよ」
それに拓馬たちも続く

しばらく歩いてるとカプセルがおかれた部屋にたどり着いた

「このカプセルは一体……」

「そのカプセルでついさっきまで、傷をいやしていたところですよ
そう言っただけの背後に現れたのはそう

「『アスタモン！』」

「お久しぶりですね、どうやらメンバーが増えてるようですが」

そう言っただけアスタモンはぬいぐるみの女の子を見る

「しかし、一人増えたところで私には勝てません」

そう言っただけアスタモンはマシンガンを構えた

「『パーフェクトゲートオープン』」

Perfect GATE open
Evolution

「ドルモン進化」

二つの門が現れずドルモンが二つ目の門をくぐりドルガモンになる
そして二つ目の門をくぐりドルグレモンとなった

「ドルグレモン」

「パタモン進化」

「ロップモン進化」

残りの二人も同じように門をくぐる

「ホーリーエンジエモン」

「アンティラモン」

「パーフェクトゲートオープン」

Perfect GATE open
Evolution

「プロットモン進化」

プロットモンが一つ目のゲートをくぐりテイルモンとなり

そして二つ目のゲートをくぐってエンジェウーモンになった

「エンジェウーモン」

「ヘルファイア」

「ヘブンスゲート」

アスタモンの弾丸をホーリーエンジェモンが防御

「ホーリーアロー」

「ブラッディタワー！」

「アシパトラヴァナ」

すかさずエンジェウーモン、ドルグレモン、アンティラモンが連続

攻撃

「ちい」

しかしアスタモンはそれをかわす

「ヘルファイア」

再びアスタモンのマシンガンが火を噴く

「ヘブンス……ぐわぁ」

先ほどと同じ方法で防御しようとしたが失敗してしまう

「同じ手に二度かかると思えますか！マーヴェリック！」

「アシパトラヴァナ」

アンティラモンとアスタモンが格闘戦を繰り広げるもアンティラモ

ンが押し負けてしまう

「強い……」

果たして拓馬たちは勝てるのか

GATE：11 共闘（後書き）

はあ、いつまで引きずるんだろこれ
とにかく！アスタモンとの決着は近いので期待して………くれると
いいな

GATE：12 飛躍（前書き）

はい、今回ストーリーが新たな展開に進む………予定です
それではどうぞ

GATE：12 飛躍

拓馬たちとアスタモンの激闘が繰り広げられているころ

「へえ、ここにD・ウオッチ持った人間がねえ」

何者かの影がアスタモンの屋敷に近づいていた

「ヘルファイア」

アスタモンの弾丸がドルグレモンとエンジェウーモンを襲う

「さすがに強い」

「ナノモンとはけた違いだ」

と、全員が頭を悩ませていると

「そうだ、さっきの、メタルティラノモン倒したあれ！」

「ヘブンズチャーム？」

「そう、それ！それならいけるんじゃないか？」

「無理ね、狙いが着けられないから」

「へ？」

「あの技は相手に当てた光の上にさらに攻撃を加える技、初弾を外すと隙だらけなもの」

「見た目の割に難しいこと言ってるのな」

「ホーリーアロー」

「ブラッディータワー」

ドルグレモンとエンジェウーモンが攻撃するもやはりかわされてしまう

「さっきはメタルティラノモンがひるんでいたから当てられたけど、アスタモン相手だとまず当たらないわ」

「くっそ、当てられないんじゃない意味ねえじゃねえか」

と、ここで思い出した

「いるじゃねえか、当たるタイミングを見極めてくれるやつが」

「そっか、卓の分析力なら」

「……………そうね、そのためにわざわざ体張ったんだものね」

そういつてぬいぐるみの女の子も卓を見る

「よし」

エンジニアウーモンがいったん離れいつでも技を出せるようにする

「ブラッディータワー」

「アシパトラヴァナ」

「エクスキャリバー」

残りの三人がアスタモンに突っ込んでいく

が、アスタモンはブラッディータワーをよけ

アンティラモンをいなした後マシンガンでホーリーエンジエモンの剣を受け止める

「まだだ！ホーリーエンジエモン」

「ホーリー・デイスインフエクション」

ホーリーエンジエモンの翼が輝いた

「ちい」

すると後ろの方から気配が

「メタルメテオ！」

ドルグレモンの攻撃がアスタモンの背中を直撃

「ぐああ」

「今よ……………」

エンジニアウーモンが本格的に技のか前に入った

「ヘブンズチャーム」

見事エンジニアウーモンの攻撃がアスタモンにヒット

地面に勢いよく落下した

「「やった」」

「「これでおわりね」」

そう思いぬいぐるみの女の子が立ち去ろうとしたとき

「ま、まだです、まだ終わりませんよ！」

アスタモンが立ち上がるが、その前に何者かが立ちふさがった

「見苦しいぜ、アスタモン、てめえは負けたんだ」

「べ、ベルゼブモン様」

「ベルゼブモン？」

ベルゼブモン

暴食をつかさどる魔王型デジモン

必殺技はダブルインパクト

「負けたやつは……………」

そう言つてベルゼブモンはアスタモンにショットガンを向け

「用済みだ」

発砲した

「ぐあああああああああ」

アスタモンはその弾丸を喰らい悲鳴を上げ消滅した

「あのアスタモンが、あんなにたやすく!？」

「あなたたちは逃げて」

そう言つてぬいぐるみの女の子は前に出る

「つて!一人でやるつもりか!俺達も」

「ホーリーアロー」

拓馬が反論している間にエンジエウーモンが攻撃する
が

「ダブルインパクト!」

上空に飛んだベルゼブモンの二つのショットガンから放たれた攻撃
がアスタモンの屋敷を丸ごと飲み込んだ

果たして拓馬たちの運命やいかに

G A T E : 1 2 飛躍 (後書き)

というわけでとうとう七大魔王の一人、ベルゼブモンが登場です
次回からいよいよ新章突入

楽しみにして……………もらえるといいな

G A T E : 1 3 妖精 (前書き)

今回から新章にふさわしい展開へと変化していきます
というわけで新章第一話スタート

GATE：13 妖精

拓馬が目を覚ましたのは岩の上だった
ドルモンも近くにいます

「ん……………」

D・ウォッチが輝いていた

「こいつが守ってくれたのか？てか、ここどこ」

「zzzz」

「てか起きろドルモン」

「で、どうするんだ」

「そうだな、とりあえず」

ドルモンをたたき起した拓馬はD・ウォッチからマップを出す

「ここを指そう、他のみんなもそうするはずだ」

たしかにそうだった、実際卓はというと

「この場所に何があるかは分からないが行ってみる価値はある」

「そうだね」

と、既に出発していた

一方真琴は……………

きれいな花畑で眠っていた

すると誰かの影が彼女の影とダブる

「ねえ、起きて」

真琴が目を開けると、髪長い女性の姿が

「お母さん……………？あれ？違う？あなたは？」

一瞬人間界の母親を思い浮かべたが、よく見ると妖精のようなデジモンだ

「私はライラモン」

ライラモン

人に愛されるライラックの花の姿をした完全体の妖精型デジモン
必殺技はマーブルショット

「そうだ！ロツプモンは？」

「うう、真琴」

「え？もしかして」

そう言っただけで彼女が立ち上がるとロツプモンが居た

「ひどいよ真琴」

「ごめんロツプモン」

「ところであなたどうしてこんなところに？」

「それが……」

真琴はライラモンにアスタモンの館で起こったことをすべて話した
すると

「ベルゼブモン、七大魔王デジモンの一角と戦ったの？」

「七大魔王デジモン」

「究極体だつて？」

一方の卓は偶然出会ったハリネズミみたいなデジモンに話を聞いて
いた

エレキモン

電気を食べる成長期の哺乳類型デジモン
必殺技はスパークリングサンダー

「ああ、究極体は完全体をも上回る力を持つてると聞く、そしてお
前があつたベルゼブモンは、その中でも特に邪悪な、七大魔王デジ
モンの一角だつて聞いたことがある」

「ありがとう！エアドラモン」
一方の拓馬も偶然出会ったエアドラモンに七大魔王のことを聞き、
お礼を言っただけで旅を続けた
「たっしやでな」

一方、真琴はロップモンと二人だけで少し心細い気分になった
ほんの少ししよげた顔で体育座りをしているといきなりライラモン
がのぞきこんできた

「わひゃ！」

「ごめん、そんなにおどろくとおもわなかった」

「もう、ライラモンってば」

「ごめんごめん、でも少しは笑ってくれたみたいでよかった」

「え？」

「だって、女の子は笑顔が一番だから」

笑顔でそういうライラモンと真琴の母の面影が再び重なった

真琴がテニスを始めたばかりのころ

「ぐすぐす」

練習で失敗した真琴は落ち込んで泣いていた

「ほら、いつまで泣いてるの、女の子は、笑顔が一番よ」

そう言っただけで母が顔を覗き込んだのを、真琴は今でも覚えていた

「……………うん！」

そうやって真琴はライラモンに飛びついて甘えていた

「真琴なんだか子供みたい」

「いいじゃない、たまには」

「あら、ずいぶん微笑ましい光景ね」

その時だった、正体不明の声が後ろから聞こえたのは

しばらくして大人の女性のようなデジモンが近くの木陰から現れた

「その姿とこの殺気、七大魔王の一人、リリスモンね」

「クス、大正解、ベルゼブモンがしとめそこなつたそこの女の子を探しに来たというわけ」

リリースモン

色欲をつかさどる究極体の魔王型デジモン
必殺技はファントムペイン

「ロップモン」

「わかっている」

「パーフェクトゲート、オープン」

Perfect GATE open
Evolution

「ロップモン進化」

ロップモンが二つ目の門をくぐりトウルイエモンになり

二つ目の門をくぐりアンティラモンになった

「アンティラモン」

「クス、その程度のデジモンで、私に勝てるかしら」

GATE：13 妖精（後書き）

はい、というわけで今回、真琴が七大魔王デジモンの一角との初戦闘
以前リリモンが出てきたときに言っていた他に出す予定の妖精型デジ
モンというのは

今回出てきたライラモンだったというわけです

GATE：14 悲哀（前書き）

今回いよいよ七大魔王との戦いに突入です

最初に挑むのは真琴&ロップモン（アンティラモン）ですが

果たしてどのような戦いを見せるのでしょうか

GATE：14 悲哀

「いけえ！アンティラモン！」

真琴の言葉を皮切りにアンティラモンはリリスモンに突っ込む

「アシパトラヴァナ」

アンティラモンがリリスモンに次々攻撃を繰り返すもリリスモンは平然としている

「クス、その程度、なら次は………私の番ね」

リリスモンは黒い笑みを浮かべ掌に邪悪な波動を集めた

「ファントムペイン」

その黒い波動でアンティラモンは吹っ飛ばされてしまった

「うっ」

「アンティラモン！」

「マーブルショット」

倒れたアンティラモンをかばってライラモンが攻撃を仕掛ける

「クス、邪魔をするつもり」

「ライラックダガー………」

「技を使うまでもないわ」

右腕を光の剣に変化させるが腹を殴られ、倒れ込んでしまう

「クス、これが究極体の力、完全体ごときでは向かおうってというのが間違いなのよ」

そう言つてリリスモンは邪悪な波動を集めた手を真琴に向ける

「ファントムペイン」

「真琴！」

アンティラモンが彼女を守るために立ち上がるうとするも間に合いそうにない、というか立てそうにない

が、突如真琴のD・ウォッチが輝きだしてバリアのようなものが彼女を守った

「これは………？」

「クス、なるほど、その時計はデジモンの技に反応して持ち主を自動で守ってくれる、でも」

そう言つてリリスモンは真琴の目の前に一瞬で現れた

「物理攻撃ならどうかしら」

そう言つてリリスモンは金色の爪がついた右腕を振り上げた

それを見た真琴は思わず両目を強くつぶった

「痛くない……………!!」

目を開けたとき、真琴の目に飛び込んだのは、自分をかばいリリスモンの攻撃を受けたライラモンの姿だった

リリスモンの爪がライラモンの体を貫通している

「いや……………」

それを見た真琴の眼には涙が

一方ライラモンはリリスモンに攻撃を仕掛けようと両腕を向けた

「ちい」

リリスモンはすかさずライラモンから離れ自身も技の構えに入る

「ライラシャワー!」

「ファントムペイン」

桃色の光と黒い波動がぶつかる

が、すぐにはいらしゃワーが打ち負け消滅してしまふ

「くああああ」

ライラモンは悲鳴を上げ、そのまま倒れ込んでしまった

「ライラモン!」

すぐに真琴がライラモンを抱える

「いやだ!死なないで!ライラモン!」

そう叫ぶ真琴の眼には大粒の涙が

ライラモンはそんな真琴の頬に触れ、笑顔を見せるとそのまま粒子になった

「あ……………」

真琴にはただ、それを見ていることしかできなかった

「真琴……………」

一方のアンティラモンも見ていることしかできない自分を悔やんでいた

が、次の瞬間異変が起こった

「うわあああああああ」

悲しみに叫び声を上げる真琴のまわりを黒い炎がうずまいていた

「クス、何？その炎？」

リリスモンも初めは楽観視していたが

「うわあああああああ」

なんとアンティラモンにも同じような黒い炎がまとわりつき、次の瞬間には姿を変えた

「な！あれはまさか」

次の瞬間、大きな黒いウサギもどきに変化していた

「あれはケルビモン、だが、ケルビモンは白き体を持つ……………クス、そういうこと」

どうやらリリスモンには突然アンティラモンが変化した理由がわかったようだ

「クス、よつぽどあのデジモンに思い入れがあったみたいね、とするとこの後は……………」

次の瞬間リリスモンはケルビモン？に殴り飛ばされていた

「クス、やっぱりこうなるわよね、でも」

リリスモンは平気な顔して持ち直す、あまり聞いていないようだ

「クス、いくら究極体といっても、闇で私に勝てるわけないわ」

リリスモンとケルビモンの戦いも一方的だった

そしてその間も真琴の周りは黒い炎が渦巻いていた

「終わりよ、ファントムペイン」

そしてリリスモンの一撃でケルビモンはロップモンに戻ってしまった
その瞬間真琴の腕に黒い電流が走った

「うわああああああ」

その電流に苦しんだ真琴はそのまま倒れてしまう

「い、いまのは」

「クス、いいわ、冥土の土産に教えてあげる、さっきのは進化じゃないわ、どういうわけか、あなたの憎しみにD・ウオッチが反応して、暴走したってわけ」

「私の……憎しみに」

「ブレイジングアイス」

突然氷の息吹がリリスモンを襲うもまったく効いてない

「クス……邪魔よ！」

すかさずリリスモンがロップモンのそばにいき思い切り蹴とばした
そしてロップモンは傷だらけで真琴の前に落ちてきた

「ごめん……真琴、僕にもっと力があれば……」

ロップモンは悔しそうな顔をしていた、その時真琴の脳裏にライラモンの言葉が浮かんだ

（「だって、女の子は笑顔が一番だから」）

「そうか、だからライラモンは、最期まで、笑っていたんだ」

そう呟くと真琴はロップモンを抱きかかえた

「わたしのほうもごめん、ろっぷもん、そして」

ロップモンを抱く真琴の表情は

「ありがとう」

笑っていた

「クス、これで終わりよ」

そしてリリスモンが右腕を振りおろしているころ、真琴のD・ウオッチはこれまでにないほど

輝いていた

D・ウオッチから光が放たれ、真琴とロップモンを包み込む
そしてリリスモンの腕はその光にはじかれた

「な……………」

次の瞬間、ロップモンの傷がいえ、二人はリリスモンに向きなおした

「行こう、ロップモン」

「うん」

そして……………

「ファイナルゲート！オープン」

二人に新たな力が芽生えた

FinalGATE open
Evolution

「ロップモン進化」

D・ウオッチから4つのゲートが出現しそれぞれ二つずつが、二人の周りを交差しながら回転していた

そしてだんだん二人の姿が重なり、一つになった

そして、全く違う姿へと進化を遂げた

「ケルビモン！」

さっきと同じケルビモン、だが体は白く、そして両耳に一つずつ、聖なる力を宿したホーリーリングがあった

GATE：14 悲哀（後書き）

と、言うわけで

ついに究極体に進化！そして

どっかしらでほとんどのシリーズ入ってた暗黒進化

まあ02にはなかったけど

しかし主人公ではなく真琴が暗黒進化

まあ、こういうのもありなんじゃないですか？

ケルビモンの活躍は次回をお楽しみに（そういえばケルビモンが出るときって毎回黒い方だよなあ）

GATE：15 笑顔（前書き）

さて、前回見事究極体への進化を遂げたわけですが
果たしてリリスモンを倒し、ライラモンの敵を取ることが出来るん
でしょうか

GATE：15 笑顔

「クス、面白い、もしかして本物のケルビモン？」
そう呟くりリスモン

ケルビモン

デジタルワールドの中核カーネルを守護するとされる究極体の智天使型デジタルモン

必殺技はヘブンスジャックメント

「でも、進化したばかりで私に勝てるかしら」

そう言っけてリスモンは技の構えに入る

「ファントムペイン」

するとケルビモンも手に稲妻のようなものを出した

「ライトニングスピア」

その槍が黒い波動をうちやぶりリスモンに向かっていくが

「当たるか！」

あっさりよけられてしまう

だが、そんなことは真琴達には関係なかった

「感じる、ロップモンと一つになっているのが」

「私も、今なら負ける気がしない」

するとケルビモンが再び技の構えに入る

「ライトニングスピア」

「ファントムペイン」

今度もライトニングスピアが打ち勝ちリスモンがよける

「これじゃキリがない」

するとリスモンが突っ込んできた

「近距離でしとめるつもりだ」

「あなたのその技、接近戦じゃ役に立たなそうなもの」

ロップモンの予想通りだったが、一つ気付いたことがあった
「もしかして……………」

ケルビモンはライトニングスピアでけん制しながら距離を取っていた
「ライトニングスピア」

「あまいわ」

リリースモンは再びよけてケルビモンに接近しようとする
が、ライトニングスピアをよけるために時間を食ったのでまた距離
が離れた

「この繰り返しではキリがないか」

そう言つてリリースモンはエネルギーをため始めた

「こうなれば持てる力のすべてを持って打ち破るまで」

一方のケルビモンはホーリーリングを光らせ両手にエネルギーをた
めていた

「ファントムペイン」

今までとはケタ違いのエネルギーが発射されたが

「ヘブンズジャッシュメント！」

ケルビモンは両手を前に出しその中心から巨大なエネルギーを打ち
出す

そしてそのエネルギーがリリースモンの技とぶつかり

相殺した

「っち、おのれ」

するとケルビモンはリリースモンに接近した

それもかなりの近距離で

そしてリリースモンの右腕をつかむとこう言った

「あなたも、接近戦では戦えないわね」

「なぜ、そのことが……………」

「確かにその爪で多少なりとも接近戦はできるみたいだけど」

ケルビモンは一度眼を閉じ、再度目を開いて言った

「ライラモンが反撃しようとした時、あなたは距離を置いた、それで思ったの、接近戦の苦手な貴方があのままライラモンの反撃を受けるはずい、だからあの時距離を置いたって」

「クス、あの連続攻撃は、私に大技を使わせて、隙を作るためだったのね」

「ええ、これで最後よ」

ケルビモンは自由な方の右手に稲妻を作り出す、距離が近すぎた為多少扱いにくかったが、リリスモンにとどめをさすには十分だったその稲妻がリリスモンの体を貫き、断末魔の叫びをあげてリリスモンは消滅した

とある場所

「リリスモンが敗れたか」

ベルゼブモンが机に足を乗せながら座っていると老人のようなデジモンが彼の前に現れた

「バルバモンか」

「おまえが取り逃した連中、思ったよりやるようだな」

バルバモン

強欲をつかさどる魔王型デジモン

必殺技はバンデモニウムロスト

「えー！リリスモン負けちゃったの？」

すると子供のような姿をした天使型デジモンがやってきた

ルーチェモン

デジモンの神から生まれたとされる成長期の天使型デジモン

必殺技はグランドクロス

「心情お察しいたします、ルーチェモンさま」
バルバモンがルーチェモンに頭を下げている、果たしてこの天使は
何者なのだろうか

ケルビモンが真琴とロップモンに分離した

「今でも信じられない、ロップモンと合体して戦ってたなんて」

「でも、現実でしょう、ライラモンの敵も取れたし」

「そうだね……………」

すると真琴はロップモンのほうを向いて

「ありがとう、ロップモン」

今までで一番の笑顔を見せた

そして二人で笑いあった後

「「疲れたあ」「」

倒れた

そのまま眠ってしまった二人の顔は、もちろん笑顔だった

GATE：15 笑顔（後書き）

というわけで見事リリースモンを倒し

ライラモンの敵を取ることが出来たわけですが

果たしてルーチェモンは何者なのでしょうか

………知ってる人もいるだろうけどあえてオフレコってことでお願い
します

さて、次に究極体への進化を遂げるのはだれなのでしょうか

GATE：16 嫉妬（前書き）

さて、今回は誰が中心の物語になるんでしょうか
それでは物語の続きをどうぞ

GATE：16 嫉妬

「卓ももう疲れたー」

彼の背中にへばりつきながらパタモンがぼやくが、彼は効いていなかった、真剣にD・ウォッチとにらめっこしていたのだ

「ねーさっきから何やってるの？もう休もうよ」

「これが地図で……このボタンでリーダーが……やっぱり通信機能はないか」

「ねーってば、ぼくの話聞してる？」

「エアーショットー！」

「うわああああー！」

「はあ、近くに湖があつてよかった」

水を飲んだらしく口を拭いてるパタモン、一方卓は

「ここがこうなつて……あ、この地図タッチパネルになつてるのか」

またD・ウォッチをいじつてた

「ん？この地図マーキング機能ついてないな……ここをこうすると……お！地図にリーダーが映つた」

「とすると……なんともないかヘルプメニューとかないのかこれ

……」

「ねえ卓」

「お！パタモンの反応に触れたら図鑑が出てきた」

「え？僕の図鑑？」

「ん？なんだこれ、隅っこに何か……」

すると彼は横に寝ているパタモンを突つついた

「パタモン、デジモンの文字読めるか？」

「ん？読めるよ〜」

「じゃあこれ、何て書いてある？」

そう言つて彼は画面をパタモンに見せた

「えっとね、上から『マーカー』『共有』『戻る』」

「戻るはまあ……………いいとして、共有つてことはこのマーカーで…
……………」

するとパタモンのいる位置に印がついた

卓達の目標地点とまったく同じ印が

「なるほど……………待てよ！てことはまさか」

卓が目標地点のマーカーをいじくると複数のデジモン反応があり、
その中に一つ、巨大な反応が

「これは……………」

七大魔王のアジト

「んあ？リヴァイアモンのやついねーな」

ベルゼブモンがルーチェモンに聞くと

「彼なら例の子供たちのところだよ」

「ほお、で、誰んとこだ、確か連中は俺が分断したろ」

「うんそれは……………」

「よし、早く二人に知らせよう」

「二人の居場所は？」

「ドルモンとロツプモンの居場所をマーキングした、これで合流が
簡単になった」

「よし、行こう」

「だが、プロットモンの反応が見つからなかった、一体彼女はどこ
に……………」

卓がそう呟いていると湖の水が持ち上がり巨大な赤い竜が現れた
「な！なんだこいつは！」

リヴァイアモン
嫉妬をつかさどる魔王型デジモン
必殺技はロストルム

「俺様はリヴァイアモン、七大魔王の一人だ」

「七大魔王デジモン!?」

「卓!進化を!」

「パーフェクトゲート!オープン」

「パタモン進化」

パタモンがゲートをくぐりエンジェモンとなり、
さらなるゲートをくぐってホーリーエンジェモンへとなった

「ホーリーエンジェモン」

「完全体など我が敵ではない!ロストルム!」

が、リヴァイアモンの口から放たれた黒いエネルギーを喰らい木に
叩きつけられてパタモンに戻ってしまう

「まさか!一撃だと」

するとリヴァイアモンがその手で卓をつかむ

「ぐあ」

「しよせん貴様らの力などこの程度、我ら魔王型デジモンの敵では
ない、圧倒的な力こそすべてなのだ」

「.....」

「力のない貴様にはわからんがな」

「違う.....」

「ん?何か言ったか」

「力だけじゃない!大事なのは!力だけじゃないんだ」

3年前

当時ベンチだった卓はチームの試合を見ていた

が……

「……遅い」

バッターのスイングを見てつぶやいていた

「……今度は早すぎ」

「なあ、もしかしてスイングが見えてんの？」

「いや、弾のほうの速度見てればわかるさ」

当時から分析力のある卓はボールを容易に撃つことが出来た
だが……

「上手に打つてもこてこてのピッチャーゴロじゃ、使い物にはならないよな」

「なあ？もしかして……」

「言わなくても自分でわかってるよ」

そう、当時の卓には力が足らずベストのタイミングでも球が飛ばなかった

「なあ、俺とバッテリ組んでみねえか」

「は？」

「俺投げんの得意なんだけど全然打てなくて、そんでベンチ送り、スピードもコントロールも誰にも負けない自信はあるんだけど、打つたら変な方向飛ぶんだよな」

「……君どっち打ち？」

「え？右だけど？」

「とすると、左に飛んでそのままファールになってたりしない？」

「お、よくわかったな」

「やっぱり、きみ早く振りすぎ、自分の投球速度に合わせて早めのタイミングで振るから横に飛ぶんだよ、きみピッチャーゴロもよくやるだろ」

「ああ、でもなんで」

「横に飛ぶのは、当たった時早めに出たバットが当たったボールに
対して斜めになってるから、で、ピッチャーゴロは先端に当たって
へんな回転がかかるから」

「お、なるほど」

「ねえ、僕の言ったことわかってる」

「まったく、今思い出すと笑っちゃうよ、あいつ、分析力のある僕なら自分の弾キヤツチできると思ってたんだから……でも」
あいつに……教わったんだ

「力じゃない！大事なのは仲間との！絆なんだ！僕にはみんなが！
パタモンが居る！だから！負けられないんだ！」

その時、本人は知らないだろうけど、真琴のときと同様に
卓のD・ウオッチが輝いていた

「ファイナルゲート！オープン！」

FinalGATE open
Evolution

「パタモン進化」

D・ウオッチから4つのゲートが出現しそれぞれ二つずつが、二人の周りを交差しながら回転していた

そしてだんだん二人の姿が重なり、一つになった
そして、全く違う姿へと進化を遂げた

「セラファイモン」

GATE：16 嫉妬（後書き）

はい、というわけで今回は卓が究極体に進化しました
この話結構構想とかで手間取ってしまいました

主人公の拓馬は一番最後ですね

え？ぬいぐるみの女の子は？

まだ秘密です

今回卓が何かつかんだようですが

まだ秘密です（でもこれはすぐにわかる）

GATE：17反撃（前書き）

さて、無事セラフィモンへの進化を遂げた卓
タイトル通り、リヴァイアモンに反撃開始です
ね

GATE：17反撃

「これが、ぼくたちの新しい力」

セラフィモン

全ての天使型デジモンを纏める究極体の熾天使型デジモン
必殺技はディバインブレイカー

「究極体に進化したか、しかもセラフィモンとはな」

リヴァイアモンは笑みを浮かべると再び黒いエネルギーをため始めた

「ロストルム！」

しかしセラフィモンも負けじと翼を輝かせた

「セブンスヘブンス」

そしてセラフィモンから七つの光球が放たれリヴァイアモンの技を
貫き彼に直撃した

「セブンスヘブンス」

更に追撃を加えた

「ち、技のモーションが早い、このままでは不利か」

そう言つてリヴァイアモンは湖にもぐってしまった

「逃がすか」

そう言つてセラフィモンは追撃をかけるが

「カウダ！」

湖の真上に来たところでリヴァイアモンの尻尾に薙ぎ払われた

「ぐああ」

すかさずリヴァイアモンが顔を出しその大きな口でセラフィモンに
食らいついた

両手で何とか支えてはいるものの閉じる力が強くなりやばい

「ここまでだ！ロストルム！」

そのまま口から黒いエネルギーを放つたのでリヴァイアモンの攻撃

をもらに受けてしまおうセラフィモン
しかも尻尾で追撃を繰り返してきた

「どうだ！これならば反撃できまい」

そっぴいなからリヴァイアモンは再び尻尾をたたきつけようとするが
「なっ……………」

その尻尾は空を切り、セラフィモンは彼の後ろにいた

「悪いね、ぼくは分析に自信があるんだ、尻尾をたたきつけてから
次が来るまでのわずかな隙くらい、簡単に見切れる」

そう言ってセラフィモンは両手を前に構える

「デivainプレーカー！」

その両手から放たれた聖なる光がリヴァイアモンを飲み込み、彼は
そのまま消滅した

「リリースモンに次いでリヴァイアモンも敗れたか」

バルバモンが机に足のつけてるベルゼブモンの前に現れた

「ま、別にいいんじゃないか、連中俺らの中じゃよええほうだしよ」

「そうだな、次はどうする、連中ケルビモンとセラフィモンに進化
したそうだ」

「…………… おもしれえじゃねえか、だとしたらもう一人もなんかすげ
えのに進化しそうだな」

そう言っつてベルゼブモンは立ちあがった

「油断するな」

「なーに、心配いらねえさ、いざとなつたら奥の手もあるしな」

その一方で卓とパタモン

「早くみんなと合流しないと」

「でも、どうやって」

「こいつが使える」

そう言っつて卓はD・ウォッチを操作し始めた

「すでにドルモンとロップモンの位置はマーキングしてある、こい

つを共有できれば」

「結構距離あるけど」

「……………いや、どうやら問題なかったみたいだ」

「これは」

「印が増えてる」

「パタモン、高速で移動してくれないか」

「わかった、二人に気付けさせるんだね」

卓の意図にきづいたパタモンはすぐにできる限りの早さで直進する

「もしかして!」

「卓が」

二人ともそれに気付き真ん中の移動している印を向かって走る

最初から目的地が一緒だったこともあり三人は割とすぐ合流できた

「にしてもすごいな卓、どうやったんだこれ」

「D・ウォッチを調べたらわかったんだ、そしてもう一つわかったことがある」

合流するや否や本題に入る卓

「ぬいぐるみの女の子が最後に残したこの印、これもデジモン反応だったんだ」

そう言つて卓はデジモン図鑑を二人に見せた

「エルドラデイモンというデジモンの」

そこには巨大な亀のデジモンが映っていた

「エルドラデイモン?」

「これによると町を一つ背負った巨大なデジモンらしい」

卓がそういつと

「なるほど、それがてめえらの目的地つてわけかい」

後ろから聞き覚えのある声が

「おまえは！ベルゼブモン！」
そう、アスタモンの屋敷で出会ったベルゼブモンだった
「今度は逃がさねえ……………ん？一人足りねえが……………ま、いいか」
そう言っつてベルゼブモンは銃を構える

「先輩、拓馬、究極体に進化できるかい？」

「俺はまだ……………」

「私はできるわ」

「僕もできる、拓馬は援護を頼む」

「ああ……………」

仲間の二人が既に究極体への進化を遂げていることで劣等感を感じる拓馬だったが

「行くぞ、ドルモン」

それを表には出さなかった

「ファイナルゲート、オープン」

FinalGATE Open
Evolution

「パタモン進化」

「ロップモン進化」

二つの交差する光輪がお互いの回るをぐるぐる回っていた
そして二人の姿が重なった

「セラファイモン」

「ケルビモン」

「あれが……………二人の究極体」

それを見た拓馬は強く拳を握りしめる
果たして拓馬が究極体に進化することはできるのか
そしてベルゼブモンとの戦いの結末は

GATE：17反撃（後書き）

というわけで17話終了です

今回は正直棒が余ったので次の話まで一気に持って行きました
果たしてベルゼブモンとの戦いの結末はどうなるのでしょうか
というわけでGATE18を楽しみにしてくださいと幸いです

GATE：18 絶望（前書き）

というわけでいよいよベルゼブモンとの再戦です

果たしてアスタモンの屋敷での借りを返すことが出来るのでしょうか？

そしてエルドラディモンとは一体？

というか拓馬は究極体に進化できるのか
それではどうぞ

セラフィモン、ケルビモン、ちょっと遅れてドルグレモンがベルゼブモンに突っ込んでいく

「ちょ、お前らはええよ」

ドルグレモンが愚痴ると

「あんたが遅いのよ」

ケルビモンがそう言って更にスピードを上げ攻撃の構えに入る

「ライトニングスピア」

「ちい」

ケルビモンの先制攻撃をかわすベルゼブモンだが

「セブンスヘブンス」

セラフィモンの追撃を受け地面にたたきつけられてしまう

「やっと追い付いた、ベルゼブモンは………そこか！メタル………」

「しゃらくせえ」

突然放たれたレーザーのような攻撃をまともに受けてしまうドルグレモン

撃墜されそのままドルモンに戻り煙を上げて気を失っている

「ドルモン！」

大急ぎで拓馬は駆け寄るがドルモンに意識はない

「くそお、俺たちじゃ、攻撃一つ許されないうつのかよー！」

「面倒だ、一気に決める」

「何？あれ」

「どつやらあれがやつの真の力らしい」

一方セラフィモンとケルビモンはベルゼブモンを見据えていた

漆黒の翼が生え右手の巨大な銃のようなものが腕と一体化していた

「なんだあの姿」

傷ついたドルモンを抱えながらこの中で唯一D・ウォッチの使える
拓馬が調べる

いや、別に究極体の姿でも使えるかもしれないが確証がない

ベルゼブモンブラストモード

精神を究極的に高めてその力を解放したベルゼブモンの真の姿
必殺技はカオスフレア

「ブラストモード？」

「知らねえなら教えてやる、デジモンの中には自らの形態を変化さ
せてさらに力を上げる者がいるんだぜ」

そう言つてベルゼブモンは足を二度ならし

「こんな感じにな！」

とてつもないスピードで一気にセラフィモンに近づいた

「カオスフレア」

そして至近距離でさっきのレーザーを当てるが

「やるな、とつさに技を出して相殺しやがるとは」

「くつ、少しでも遅れたら確実にやられていた」

余裕のベルゼブモンに比べてセラフィモンには焦りの表情が見えて
いた

「ヘブンズジャッジメント」

すかさずケルビモンがベルゼブモンに攻撃を仕掛けるが

「おせえよ」

ベルゼブモンが右腕の銃で相殺、すかさず第二撃を放った
ケルビモンはその攻撃を受けよろめく

「くそ、俺は何もできないのか」

ドルモンを抱えながら悔やむ拓馬

「た……………拓馬……………」

「あ！気がついたか」

「あいつらを……………たすける、もう一度」

「その体じゃ無理だ」

無理しようとするドルモンを止める拓馬

「だけど、このまま足を引つ張ったままなんて！おれは嫌だ」

「……………それは俺も嫌だ、でも！お前お失うことはできない！」

「拓馬……………」

すると、拓馬のD・ウォッチが輝いていた

「ファイナルゲート！オープン」

FinalGATE open
Evolution

「ドルモン進化」

他の二人と同じように二つの輪が互いを囲い回り続け

一つになった

「アルファモン」

そして黒い鎧をまとった騎士のようなデジモンに進化した

アルファモン

神話に登場する伝説の聖騎士型デジモン

必殺技はグレイダルフアー

「馬鹿な！アルファモンだと！そんなバカなことが」

アルファモンの登場に驚き、戸惑った様子のベルゼブモン

次の瞬間には

アルファモンが彼の後ろに立ち、切りつけられた傷があった

「なぜ……………貴様がその力を……………」
「ロイヤルナイト」の力を……………

…畜生！」

そう吐き捨ててベルゼブモンは逃亡した

「ロイヤルナイツ？」

アルファモンはベルゼブモンが残した言葉が気になるようだった

「手酷くやられたな」

「ウルセーバルバモン、次はこうはいかねえよ」

座り込んだベルゼブモンにバルバモンが話しかけた

「……………ところでお前が仕入れた情報に関してわかったことがある」

「ああ、なんで連中がエルドラディモンを目指しているかだな」

「どうも”奴”が一枚かんでるらしい」

「……………そいつは本当か」

「ああ、エルドラディモンの反応の中にそれらしい反応を見つけた」

「連中がなんであんな大層なデジモンに進化できたかまでは分から

ねえか？」

「いや、わかったのは奴が関係していることだけだ」

はたして”奴”とは

そして”ロイヤルナイツ”とは

GATE：18 絶望（後書き）

はい、というわけで拓馬も無事進化できました

あ、因みにD・ウォッチは心を一つにした時完全体への進化を可能にしましたが

究極体の進化には強い決意が必要という設定にしました

それと、デジモンの技に関しても話の都合上一部変更があります（これはいまさらですが）

というわけで、次のGATE19も楽しみにしていただけると幸いです（ちなみにアルファモンのデジタルイズオブソウルも都合上没にしました）

GATE：19 聖域（前書き）

いよいよ究極体三体そろい踏みとなったわけですが
はたして前回の最後でベルゼブモン達が言ってたやつとは何者なの
でしょうか

それでは話の続きをどうぞ

GATE：19 聖域

エルドラディモンを目指し旅する拓馬たち

しかし相手は移動する巨大なデジモン、そう簡単に追いつけるはずもなく

「結局こうなるわけだな」

究極体に進化して飛んでいくこととなった

「見えた、あれがエルドラディモンだ」

ほどなくして揺れ動く遺跡のようなものを見つけたが、近くまで来たところで何かが飛んできた

「セブンスヘブンス」

「ライトニングスピア」

ケルビモンとセラフィモンがそれぞれの技で相殺

アルファモンも剣で切りながら進んでいく

そしてエルドラディモンの近くまで寄ってみると、金色に輝くデジモンが仁王立ちしていた

拓馬たちはそのデジモンの近くまで飛ぶと進化を解除して降り立った

「もう来たのか……………」

マグナモン

いかなる困難な状況に陥ろうとも奇跡の力で切り抜けることができると言われるデジモン

必殺技はエクストリームジハード

「もう来た？僕達がここに来ることをわかっていたのか？こいつあのぬいぐるみの女の子と何か関係が？」

卓がそう思っていると拓馬が

「いきなり何するんだ！さっきの攻撃おまえだろ」

「待て、こいつもしかしたら」

「そっちのほうはなかなか鋭いな、私はお前たちの味方だ、さつきのはお前たちのじつりよくをためしたまで」

「だったら名前くらい」

「マグナモン、アーマー体、聖騎士型デジモン」

「ん？ああ、D・ウオッチの図鑑か、ところでアーマー体ってなんだ？」

「さあ？」

「おまえたちは気にしないでいいことだ、ついて来い、中を案内しよう」

そう言つてマグナモンはさっさと行つてしまった

「おまえたちはこの部屋を使い、ベッドは用意しておいた」

「やっぱりお前は僕達が来ることが分かったいたのか」

「まあな」

「あれ？でも四つしかないぞ？あとの2つは」

「デジモンなら床で寝てろ、葉ぐらいなら倉庫にいくらでもある」

「チエ、冷てえやつ」

「いや、たぶん葉っぱはいらなだろう、この大きさならデジモンと一緒に寝れる」

「？だとしても1つ多いな」

「気にしないでいい、一番小さいのは空けておけ、あとで必要になる」

「やっぱりあいつ、ぬいぐるみの女の子とつながりがあるのか？」

「着いたぞ」

マグナモンの案内で塔の一番高いところについた

「私は基本ここにいる、都のことでききたいことがあったらいつでもこい……………ん？」

「都のことではないが、お前にききたいことがいくつか……………」

「あとにしる、敵だ」

卓がきこうとしたのをマグナモンがさえぎった

「あれは………スカルサタモンだな、ちょうどいい、お前たちの力を見せてみる」

「つて、お前は戦わないのか」

「俺は今訳あつて戦うことが出来ない、後で説明してやるから奴らを追いついてこい」

「ヒヤッハッハッハ」

スカルサタモンの大群の大將格らしきデジモンが笑い声をあげている

スカルサタモン

強さと破壊だけを求める完全体のアンデッド型デジモン

必殺技はネイルボーン

「完全体か」

「でもこの数だし」

「マグナモンもあいつてるしな」

「『ファイナルゲート、オープン』」

FinalGATE open
Evolution

「ドルモン進化」

「パタモン進化」

「ロップモン進化」

それぞれがパートナーデジモンとともに二つの輪に囲まれ一つになった

「アルファモン」

「セラファイモン」

「ケルビモン」

「ネイルポーン」

スカルサタモンが持つてる杖から光が放たれるが

「ヘブンスジャツジメント」

ケルビモンの攻撃で打ち消されそのまま数体消滅する

「セブンスヘブンス」

更にセラファイモンの攻撃を受けまた何体か消滅

アルファモンも高速で切りつけているのか所々でスカルサタモンが
消滅している

「ほう、もうあそこまで戦えるか」

そんな彼らの姿を塔から眺めているマグナモン

しばらくしてスカルサタモンは大將格のみとなった

「おまえ、七大魔王の手下だろ」

「ぎくう」

アルファモンの問い詰めにぎくりとなるスカルサタモン

まあばれるだろ

「奴らによるしく言っておけ」

アルファモンがそういうとその場から消え

「あの世でな」

スカルサタモンの大將格も瞬殺された

「やはりスカルサタモンごときではこの程度か」

それをどうやったか水晶玉で眺めていたバルバモンはあきれ返って
いた

「なかなかやるようだな」

「マグナモン、ききたいことがある」

「わかっている、なんだ、行ってみろ」

「ロイヤルナイツとは何だ？前に戦ったデジモンが進化したドルモンと拓馬を見てそう言っていた」

「ん？ぬいぐるみの女の子のことは聞かないのか？」

「どうせ答えてくれないんだろ」

「ああ、そっちの質問は無理だ、そのうちな、ただ、ロイヤルナイツのことならよく知っている」

果たしてロイヤルナイツとは

そしてマグナモンとぬいぐるみの女の子の関係は

GATE：19 聖域（後書き）

というわけでGATE19終了です
いろいろと謎が増えましたが

これからもこの小説を見守ってくれると幸いです

そして次回はいよいよGATE20

楽しみにしてくださいと幸いです

GATE：20真相（前書き）

さて、いよいよ謎がいくつか解明されることに
果たしてマグナモンからどんな話が聞けるのでしょうか
それでは話の続きをどうぞ

GATE：20真相

「さて、ロイヤルナイツについて説明するには、まずこの世界の現況について話さなければならぬ」

マグナモンはそういいながら拓馬たちのパートナーデジモンを一度ずつ見た

「もともとこの世界はデジタルワールドの神、イグドラシルを中心にいくつかの勢力に分かれていた、その中でもロイヤルナイツというのはデジタルワールドの神、イグドラシルを守護する存在だ、また、この世界の平和を保つ三大天使デジモンというのが他に存在する」

「ちょっと待ってくれ、ロイヤルナイツがどういう存在かはわかった、しかしなぜ三大天使デジモンの話になる」

マグナモンの説明の途中で卓がさえぎった

「無理もないか、確かにお前の言うとおりだ、だがこの話は無関係ではない」

そう言つてマグナモンはパタモンとロップモンを見た後話を続けた
「おまえたちの進化したデジモンのうち、セラフィモンとケルビモンはその三大天使デジモンの一角だ」

衝撃の事実が発覚、だが

「三大天使デジモンはこの世界の平和を保つ存在なはず、なぜ僕たちはそんなデジモンに進化できた」

確かに、それほど高位な存在だ、数は少ないだろう

「そのあたりについてはこれから話す、この世界に存在する勢力の中には今お前達が対面している七大魔王デジモンたちがある、もともとこのデジモンたちは平和を嫌い、他の二つの勢力と争いを続けた、そして長い戦いのさなか、ひげきはおきた」

そこでマグナモンは悲しげな顔をする

「長い戦いのさなか、イグドラシルが襲われ、13体のロイヤルナイツのうち11体が犠牲になり、イグドラシルも敵の手中に落ちた」
「そんな!？」

「デジタルワールドのデータは書き換えられ、本来卵にかえるはずのデジモンのデータが、何処かに集められていった」

「卵に？」

「そうだ、本来ならデジモンの命が尽きると、再構築され卵に戻る、まれに生前の記憶が残ったりするケースもあるしな」

「でも、今はそれがない」

「そうだ、何らかの理由でデータを集めるのが目的だろう、倒した魔王型デジモンは何体だ？」

「えっと、ベルゼブモンには逃げられたから」

「私はリリスモンを」

「僕はリヴァイアモンを倒した」

「とすると後そのベルゼブモンを含め5体の魔王型デジモンが存在するはずだな」

マグナモンはそう言ったあと窓の外を見た

「何か目的があってデータを集めているのだろう、その目的についてはわからない、話を戻そう、そしてその後も長い闘いは続き、戦いのさなか、三大天使デジモンの一人、オファニモンがすべての力を使いきってしまい、力と記憶を失った、そしてそのごも苦しい闘いは続き、つい最近、残り2人の三大天使デジモンもすべての力を使いきった、そしてまた、生き残ったロイヤルナイツの一人も、力を使いきり記憶を失った」

マグナモンがここまで話したところで卓が何かに気がついた

「待て!ということはドルモン達は」

「そうだ、記憶はないだろうがお前たちのパートナーデジモンは、

三大天使デジモンとロイヤルナイツの生き残り、アルファモンが力を失った姿だ」

「やはり、とするとお前は……………」

卓はまだ気がついたことがあるらしい

「おそらくお前の感じていることは正解だろう、あえて私は話さない、お前の予想を言ってみる」

「アルファモンのほかにもう一人生き残ったロイヤルナイツが居ると、お前は言っていた、お前はそのロイヤルナイツの生き残りじゃないのか」

卓のこの言葉で拓馬を含む全員がマグナモンを見る

「……………その通りだ、俺もまた、ロイヤルナイツの生き残りだ、だが俺はこれまでの戦いでほとんど力を使いきってしまった、このまま戦い続ければじきにお前たちのように成長期に戻ってしまう」
そう言ってマグナモンはじっと手を見る

「だから賭けに出ることにした、残っていたイグドラシルの力を使い、他世界の人間を呼びよせるといふ賭けに」

「そうしてやってきたのが僕たちというわけか」
納得している卓と違って他のみんなは半分も理解できていないのだ
った

「ここはダルクモンの救援部隊とほぼ同じようなものだ、元からこの都に住んでたデジモンもいる」

ピンクの妖精っぽい丸いデジモンやなんか花っぽいデジモン、まんまパンダのデジモンや中にはガルダモンの村で見たリリモンの姿もある

ピッコロモン

魔法を操る完全体の妖精デジモン

必殺技はピットボム

フローラモン

ヘルメット状の花びらで身を守っているデジモン

必殺技はアレルギーシャワー

パンダモン

ぶっきらぼうな性格で実は完全体のデジモン

必殺技はアニマルネイル

「あそこをしてみる、あのデジモンたちは元からここに住んでいた」
そう言つてマグナモンは塔の外の池のようなところを指差す、そこ
には人魚のようなデジモンとたくさんの亀っぽいデジモンがいた

マーメイモン

綺麗な音色の歌声で聞くものを魅了する水棲獣人型デジモン

必殺技はチャームプランダー

カメモン

マウスの様な甲羅を背負つたサイボーグ型デジモン

必殺技はポインタアロー

「この説明は終わりだ、私は少し休ませてもらう」
そう言つてマグナモンは塔の頂上に向けて歩いてつた
そしてその日は敵襲もなく平穩に過ぎて言つたのだった

GATE：20真相（後書き）

というわけで記念すべきGATE20終了です

今回またバトルありませんでしたね

今回は都の紹介と謎の解明に専念しました

それでは次回GATE21を楽しみにしていただけると幸いです

GATE：21魔獣（前書き）

さて、前回さままざまな謎が解明されましたが
今回はどんな相手との戦いが待っているのでしょうか

GATE：21 魔獣

マグナモンから話を聞いた翌朝、拓馬たちは塔の一室でほかのデジモンたちとともに食事を取っていた

「マグナモンが居ないけどあいつは食べないのか」

果物をかじりながら拓馬がリリモンに聞く

因みにこの塔に住むデジモンのほとんどがフローラモンで次点にリリモン、パンダモン、ピッコロモンと続く

カメモンとマーメイモンは下の泉にごく少数すんでるのみだ

マーメイモンにいたっては昨日見た一人だけらしい

「マグナモンさまはいつもご自分の部屋で御食べになってるんです」

「ふーん」

塔の自室の窓によつ掛ながら林檎らしき果物をかじってるマグナモン
「静かだな……………」

そう呟いてもう一度果物をかじるのだった

一方拓馬たちは

「つまりここをこうすれば」

「あ、なるほど」

「じゃあここをこうすると」

D・ウオッチの機能を三人で再度調べなおしていた

「どうですか？」

そんな三人の様子をリリモンが見に来た

「今のところ変わった様子もないよ、リーダーに映っているのも周りに住んでるでもんたちだけだ」

そう言っただけで一番機能を理解している卓がリリモンにリーダーの様子をリリモンに見せていると

「ほう、ずいぶん慣れてきているな」

なんとマグナモンが様子を見に来ていた

「そうだマグナモン、きみに確認したいことがあるんだけど」

「なんだ？言ってみる」

「僕たちは究極体になるとパートナーデジモンと一つになるだろ、その間このD・ウォッチの機能は使えるのかと思って」

「問題ない、意識して使おうとすればできるはずだ」

卓の質問にあっけなく答えるマグナモン

「そうか、試してみているか？」

「別にかまわないがここは狭いから外でやってくれ」

「それもそうだな……ん？」

「どうした？」

「隅っこのほうに新しい反応が、待ってくれ、今出す」

そう言っただ卓は新しく出たデジモン反応の凶鑑を引き出す

「えっと……よし、出た」

キメラモン

恐るべき闘争本能持っておりありとあらゆるモノを破壊し続ける
必殺技はヒートバイパー

「キメラモンか、厄介だな、おそらく七大魔王の手のものだろう、襲撃に備えるよう私から伝えておく、お前たちは究極体に進化して迎撃の用意をしてくれ」

「わかった」

「……ファイナルゲート、オープン」

FinalGATE open

Evolution

いつものように二つのリングで囲まれたお互いが一つに重なる

「ドルモン進化」

「パタモン進化」

「ロップモン進化」

そして究極体の姿へ進化を遂げた

「アルファモン」

「セラファイモン」

「ケルビモン」

「近くで見るのは初めてか、確かに私の知っているデジモンたちだ」

「お、マグナモンも来ていたのか」

「私は前線に出れないからな、忠告しに来た」

「忠告？」

「キメラモンは強大なパワーを有するデジモンだ、なかには究極体のデジモン10体を倒した記録さえある」

「まじ？こっちは三体だけ」

「心配するな、リリモンやピッコロモン達が援護する、完全体とはいえ戦力にはなるだろう」

「え？ピッコロモンって完全体だったの？」

完全体です

「というわけで……」

先頭にいるリリモンがアルファモンの前に行き

「がんばってください」

「がんばってくださいじゃねえよ！何？援護ってこっからの援護射撃？ここテラスじゃん、めっちゃ距離あるじゃん」

「当てる自信はあります」

「そういう問題じゃねえ！あんたら結局俺らに丸投げしてるだけじゃねえか」

「え？ですが」

「援護射撃だけで十分だろう、お前達が危険を顧みる必要はない」

「って、マグナモンさまが」

「あんにやるー後で覚えてるよ」

リリモン達に悪気はないようなので迎撃体制へと戻るアルファモン

「いいのかな、リリモン達も巻き込んだじゃって」

少し心配になるケルビモン、ちなみに真琴のほう

「大丈夫、今回は援護射撃だけだからあの時みたいにはならないって」

ロップモンが真琴に語りかける

「あの時ってなんだ？」

「いや、聞かない方がいいだろう」

ロップモンが言うあの時とはライラモンが真琴をかばって死んだあの一件だ

「で、相手は何体なんだ？」

「この反応だと5体ってところだろう」

セラファイモンがそう言ってパネルを閉じる

すると前方から凶鑑で見たのと同じキメラモンが飛んできた

「行くぞ」

「フラウカノン」

「ピットボム」

援護射撃の為必殺技を次々放つリリモンやピッコロモン達

そんな中不穏な影が

アルファモンの剣と2体のキメラモンの腕ががちり組み合っていた一方セラファイモンとケルビモンはそれぞれ一体ずつと攻防を繰り返す

げていた

と、そこへ

「きゃあああああ」

リリモンの悲鳴が

見るとのこり一体のキメラモンがリリモンやピッコロモン達に襲いかかっていた

「まずい！このままじゃ」

「……………ない」

するとケルビモンの様子がおかしい

「誰も死なせない！」

そう叫びライトニングスピアを取り出し、あっという間にキメラモンを倒した

「フラウカノン」

一体のリリモンが後ろのピッコロモンやほかのリリモンを庇いながらキメラモンを攻撃するも、まったく効いた様子がない

「ぐるああ！」

そのままキメラモンの腕で薙ぎ払われ気を失ってしまう

他のデジモンたちがよってリリモンを介抱しようとするキメラモンが口にエネルギーをためはじめた

が、そのエネルギーが放たれる前にキメラモンの体を稲妻が貫いていた

ケルビモンのライトニングスピアだ

「もう、あんな悲しい思いはしたくないから」

アルファモンの剣が二体のキメラモンを切り裂いた

更にセラファイモンの光線が最後のキメラモンを消滅させる

「そうか、そんなことが」

戦闘の後、ロップモンから事情を聞いた拓馬たちがリリモンの手当てをしている真琴を見る
が、真琴は変わらず笑顔のままだった

GATE：21魔獣（後書き）

ハイ、今回は同じ妖精型ということでライラモンの一件を引っ張ってみました

次回はいよいよ………というわけで次回を楽しみにしていただけると幸いです

因みにキメラモンは設定上作られたデジモンなので理性は全く出しませんでした

GATE：22再会（前書き）

今回は手ごわい相手の登場です
前回までは完全体ですが今回は……

GATE：22再会

「これでよしつと」

前回負傷したリリモンの手当てを終えて真琴が立ち上がる

「ありがとうございます」

「いいのよこれくらい」

その夜、拓馬はドルモンとともに塔の中を徘徊していた

「ん？」

するとマグナモンが一つの部屋から出てくるのが見えた

「マグナモン」

拓馬が話しかけるとマグナモンは驚いたような表情を見せる

「ああ、お前か」

「どうしたんだ？この部屋は……………」

「いや、なんでもない、それより明日も敵が来るかもしれないからそれに備えておけ」

「あ、ああ……………」

その頃

「やはり完全体ではこの程度か」

「どうすんだ？」

バルバモンとベルゼブモンが話していた

「究極体の戦力は少ないが……………あのデジモンでいいだろう」

翌朝

「マグナモンのやつ、あの部屋に何の用だったんだろう」

翌朝も考え込んでる拓馬

「あら？マグナモンさま」

フローラモンの一言で拓馬は飲み物を吹きそうになるもぐつとこら

える

「おまえ、普段自分の部屋で食べてるんじゃないの？」

「すでに朝食は食べた、その……お前たちの名前を聞いておこう
と思っただけ」

「は？拓馬」

「いや、苗字もだ」

「この世界に苗字なんてあるのか？僕は天野卓だ」

「若槻真琴」

「（やはりちがうか）」

と、最初の二人が自己紹介した時はまだ冷静だったが

「宮原拓馬」

「宮原！？」

拓馬が名乗った途端マグナモンが驚いたような表情を見せる

「おい！お前妹はいないか？」

「妹？いたにはいたけど6年前に蒸発したよ、そのときは生まれた
ばかりだったけど」

「6年……やはり……いや、なんでもない、忘れてくれ」

「……？」

マグナモンの不審な様子に疑問符を浮かべる拓馬たちだった

「敵だ」

しばらくして卓が敵の反応をキャッチした

「どんなデジモンだ？」

マグナモンが聞いてきてすぐに卓は図鑑を出す

オニスモン

「天空の覇者」と呼ばれている究極体の獰猛な鳥獣型デジモン
必殺技はコスミックレイ

「究極体、それもオニスモンか、それで、何体だ」

「4体……」

「そうか、昨日のキメラモンのようにはいかない、援護射撃を組もうものなら今度こそ死者が出る、本当ならあともう一体……究極体のデジモンがいればよかったんだが」
そう話しながらマグナモンは遠くを見るような瞳をする

アルファモン、セラフィモン、ケルビモンがエルドラディモンを守るように反応のある方向へ構えている
そしてついに

「来た！オニスモンだ」

三体の巨大な鳥……って言うか

「でかすぎるだろ！エルドラディモンほどじゃないが相当なサイズだぞ」

まさかオニスモンがこれほどのサイズを有するデジモンとは
それも四体

「コズミックレイ」

「ダイバインブレーカー」

セラフィモンがオニスモンの攻撃を相殺する、そしてすかさずアルファモンが斬りかかるが

「つく、やっぱり体格が違いすぎる」

「コズミックレイ」

そのままアルファモンは別のオニスモンの攻撃を背中に受けてしまう
「くそ、もう一度だ」

アルファモンがもう一度切りかかる

「セブンスヘブンス」

「ライトニングスピア」

そしてセラフィモンとケルビモンで二体のオニスモンの動きを封じるが

「くそ」

アルファモンが斬りかかったオニスモンの動きを封じたすきに一体

が抜きんでてエルドラデイモンに突っ込もうとしていた

「セフィロートクリスタル」

突然天からたくさんの水晶が降ってきてオニスモンに当たった

「エルドラデイモンには指一本触れさせない」

そこには女性の姿をした天使のようなデジモンがいた

「まさかあのデジモンは」

セラフィモンがデジモン図鑑を開いた

オファニモン

神の深い慈愛を体現する究極体の座天使型デジモン

必殺技はエデンスジャベリン

「オファニモン、以前マグナモンが言っていた三大天使デジモンか」

「でも、力を失ったって」

と、アルファモン、ケルビモンが話していると

「そうか、そういうことか、きみはぬいぐるみの女の子だな」

と、セラフィモンが聞くと

「そうね、あなたたちは私のことそう呼んでいたみたいだけど」

「ということは、オファニモンはプロットモンが究極体に進化した姿なのか!？」

どうやら間違いないようだ

するとさっきオファニモンに撃墜されたオニスモンが再び舞い上がる

「邪魔をしやがって、喰らえ」

再びコズミックレイを放とうとするオニスモン、標的はオファニモンだ

「コズミックレイ」

するとオファニモンは上に飛んで避ける

「どうやらその技は狙いがつけられないようね」

確かに、普通なら首を上にあげて追撃するはずがオニスモンは首を

動かす様子がない

「エデンスジャベリン」

セラフィモンやケルビモンと違い鋭い形状をしている、光でできた槍のような光線はオニスモンを貫いた

「デイバインブレーカー」

「ヘブンスジャツジメント」

セラフィモン、ケルビモンも同じ手段でオニスモンを撃破

「そらぁ」

アルファモンは首元を剣で突き刺して撃破した

そして三人は地上に降り立った

遅れてオファニモンも遺跡のテラスの近くに降り立ち

進化が解除され、プロットモンとぬいぐるみの女の子に分離した

「どうやら無事これたようだな」

そんな二人にマグナモンが話しかけた

「おまえたち、わたしの部屋にこい、いよいよすべてを話す時が来た」

GATE：22再会（後書き）

というわけでGATE22終了

次回いよいよすべての謎が明らかか？

というわけです。つぎのGATE23を楽しみにしていただけると幸いです。

GATE：23 正体（前書き）

というわけでGATE23です

前回行方不明になっていたぬいぐるみの女の子と再会したわけですが
果たして今回はどうなるのでしょうか

GATE：23 正体

ぬいぐるみの女の子とマグナモンが塔の中を歩き、一つの部屋の前で止まった

「ここって昨日お前がいた」

「ここだ、待っている」

そう言っただけでマグナモンが部屋の中に入った

「ここって何なの？」

「倉庫」

真琴の疑問に答えたのはぬいぐるみの女の子だった

「は！？倉庫？」

確かに中からガチャガチャと音が聞こえてくる

マグナモンが何か探しているようだが

「手伝いましょうか？」

「いや、いい、もう見つかった」

ぬいぐるみの女の子がマグナモンに語ると彼はそう答えて出てきた

「昨日いつでも出せるようにしておいたんだがな」

「また中の荷物が崩れでもしたんじゃないかしら？」

何やら二人は親しげに話しているが

「用事も済んだことだし事の次第を説明しよう」

「昨日ここに来た時点で持っておけばよかったんじゃない……」

「さて、前に話したと思うが、このデジタルワールドとお前たち人間の世界は本来交わることない別の空間だ」

そっぴいながらマグナモンは座り、拓馬たちやぬいぐるみの女の子も座った

「だが、つながった前例がないわけでもない、過去に何度か人間世界とつながった例があってな、物がいくつかこちらの世界に流れ込んできた、彼女が今着ている服もその一つだ、あの倉庫にはそっぴい

つたものを保管してあつた」

そう言つてマグナモンはぬいぐるみの女の子を見る

「彼女もまた、この世界に流れ込み我々ロイヤルナイツが、このエルドラディモンの中で保護していた、もう6年になる」

「6年前……………」

「その時に彼女の身の回りのものもいくつか流れ込んできた、流石に衣服は他で流れ込んだものだが」

ま、いつまでもサイズが合うわけないし

「私が探していたのはその時のものだ」

そう言つてマグナモンが差し出したものには母子手帳と記されていた

「母子手帳……………なんでこんなものが、てか誰のだよ」

「私のよ、名前もそれに書いてあるわ」

拓馬がぼやいているとぬいぐるみの女の子がそう答えるので中身を探つていると

「これじゃないか？ほら、出産通知表つて書いてある」

出産通知表に子供が生まれた際その子供の名前などを書いて役所に提出する紙

「ああ、それだどれどれ……………宮原舞……………これが……………君の名前？」

「拓馬と同じ苗字ね」

「どうやら苗字だけじゃなさそうだな」

そう言つて卓が持つてる紙には彼女を出産した病院や母親の名前が書いてあつた

「川崎市総合病院……………それに」

母親の名前も、拓馬には見覚えがあつた、ということとは

「年齢や病院、見る、血液型も拓馬と同じだ」

「ということは君は……………6年前に蒸発した、俺の妹……………」

「やはりそうだったか、昨日お前の名前を聞いた時からそうじゃないかと感じてはいたが、それとは同時にお前達にD・ウォッチに選ばれた理由もはっきりした」

「そうか、なくなった母さんのペアウオッチ」

「その時計も彼女と一緒に流れ込んできてな、彼女がしているD・ウオッチはその時計にイグドラシルの力を宿して変化したものだ」

「じゃあ、ぼくたちの時計は」

「彼女のD・ウオッチに宿っていたイグドラシルを四つに分けて、この世界から人間界へと飛ばしたことで、お前たちの時計がD・ウオッチに変化した、同じペアウオッチを持つお前が選ばれたんだろ
う」

そう言つてマグナモンは拓馬を見た

「おまえたちは選ばれるべくして選ばれた、私はそう思っている」

「私がこの世界に来た時にはすでにこの世界は戦乱の世と化していた、私は2年前に力を失つたオファニモン、今のプロットモンと一緒に少なからずマグナモン達に協力していたわ」

「ちよつと待つてくれ、じゃあまさか君は」

「ええ、一年半くらい前に既に究極体への進化を会得していたわ、でも、私だけじゃ七大魔王にはかなわなかった、犠牲も増えていき、マグナモンの提案で人間界から増援を呼び寄せることになった、私はあなた達が戦えるようになるまで影から支える為、あえて自分で戦うことは避けていたわ」

「じゃあベルゼブモンが襲ってきたときなんで究極体にならなかつたんだ？」

「こつちの目論見がばれる恐れもあつたし、なにより」

「何より……………」

「なぜかは知らないけど、究極体には成長期からじゃないと進化できないのよ」

そこはデジモン作品の永遠の謎

それを聞いて拓馬たちはずっこけてしまった

「……………」

その夜、拓馬はテラスで夜風に当たっていた、とそこへ

「隣……いいかしら？」

「ん？ああ、いいよ」

ぬいぐるみの女の子改め、舞がやってきた、彼女もまた拓馬たちと同じ部屋で寝泊まりしている

「そついえは舞」

「え？……」

少し驚いた表情を見せる舞、いきなり本名で呼ばれたのだ

「おまえ、思ったよりしゃべるんだな、はじめてあったときはもっと無口なのかと思ってた」

拓馬の一言でずっこけてしまう舞

「そつね、もしかしたらうれしいのかもしれない……」 兄さん
にあえたから」

「さつて、そろそろ寝るか、ドルモンがベッド占拠してなきやいいけど」

「プロットモンはきつと大丈夫、寝像いいから」

「うらやましいな、俺なんか昨日ドルモンに蹴とばされたのに」

そう話しながら二人は部屋の中に戻って行った

GATE：23 正体（後書き）

というわけでGATE23終了

ぬいぐるみの女の子の正体が拓馬の妹と判明しました

一応GATE0とGATE22を使って複線は張ったつもりですけど
一体どれだけの人がわかった事やら

というわけで次回もまた楽しみにしていただけると幸いです

GATE：24 重荷（前書き）

はい、というわけで前回からぬいぐるみの女の子改め宮原舞が仲間入りしたわけですが

今回はどのような展開になるのでしょうか

GATE：24 重荷

朝、拓馬たちはエルドラディモンの鳴き声で目を覚ました

「毎朝これだからいい加減慣れたけどエルドラディモンうるせえ」

そう言っつて耳をふさぐ拓馬

「つか、ドルモンおきろ、お前また寝ぼけておれのこと蹴っ飛ばしやがって」

「大変よ拓馬！」

「ん？ああ、プロットモンか、ろくに会話したことなかったしエンジエウーモンのときとかと声違うからわかんなかった、どした？」

「舞が……………」

「けほっ、けほっ」

顔が赤く息も荒い

「風邪のようだな、熱もひどいし」

「疲れがたまっていたんだろっ」

「マグナモン！」

マグナモンが突然入ってきた、どうやらプロットモンが呼んだらしい

「彼女は六年もの間この戦乱続く異世界で過ごし、そのうちの二年間、自らも戦い続けていたんだ」

そう言っつてマグナモンは部屋から出ようとして

「すこしくらい休ませてやろっ」

そう言っつて出て言った

「なあ、俺今日外れていいか？」

「何する気だ？」

拓馬が突然こんなことを聞くので戸惑う卓

「もちろん舞の看病だ、舞は俺の妹だからな」

「……………わかった、ちょっと待っていてくれ、マグナモンに掛け合ってくる」

「私、リリモンに薬の代わりになるものがないか聞いてくる」
そう言つて二人は部屋から出て言った

「俺も残るぜ、拓馬がいないんじゃないしな」

「私も舞が心配だから」

ドルモンとプロットモンも残ることになった

マグナモンも許可してくれ、リリモンに熱に効く薬草をもらった拓馬

「さ、これを飲むんだ」

そう言つて拓馬が舞に薬草をすりつぶしたものを飲ませる

「つぎはっ」と

「拓馬！氷貰ってきたぜ」

「そのままじゃまずいよな、プロットモン、タオルかなんかある場所知らないか？」

「それなら昨日の倉庫に」

「わかった、とってくるからちょっと待っていてくれ、ドルモン、氷は温度の低いところに、とりに言ってる間に溶けたら困るから」

そう言つて拓馬は出てった

一方その頃、エルドラディモンに敵が迫っていた

「D・ウォッチを持つ者たち！その首もらいうける」

カラテンモン

修権道に長けた完全体の魔人型デジモン

必殺技は衝撃羽

「完全体か……………けど」

「数、多すぎない？」

この前のスカルサタモンも結構な数いたがそれに匹敵する

「まあいい、行きましょう、若槻先輩」
「ええ」

「ファイナルゲート、オープン」

FinalGATE open
Evolution

「パタモン進化」

「ロツプモン進化」

二人がそれぞれのパートナーとともに二つの輪に包まれる

「セラフィモン」

「アンティラモン」

その頃拓馬は額を冷やしてるところだった

「外が騒がしくなったな、敵が来たのか？」

そう思い窓の外を見る拓馬

「兄さん……………」

「あ、目が覚めたのか」

少し落ち着いてきたようだ

「ごめんなさい……………足手まといになっちゃって」

「気にするな、お前は今まで散々俺たちを助けてくれたじゃないか、オロチモンのときとかメタルティラノモンのときとか」

「……………うん」

するとここで窓（ガラスないけど）からカラテンモンが侵入しようとしていた

「やべえ」

「プロットモン……………お願い！」

「ムリだよ舞！今究極体になったら……………」

「いや、方法はある」

「「え？」」

「パーフェクトゲート、オープン」

PerfectGATE open
Evolution

「ドルモン進化」

ドルモンが光の輪をくぐりぬけ赤き龍へと姿を変える、そして

「ドルグレモン」

カラテンモンを窓の外へ突き飛ばした

「そうか、究極体は無理でも、完全体なら」

「ならプロットモン、あなたも」

PerfectGATE open
Evolution

「プロットモン進化」

プロットモンが光の輪をくぐりぬけ女性の天使へと姿を変える

「エンジェウーモン」

「これなら十分だ」

そついいながらセラフィモンが次々カラテンモンを倒していく

そして窓の周囲はエンジェウーモンが守ってくれていたので拓馬は

看病に専念できた

翌朝

「フア〜、やっぱりエルドラディモンうるせ〜」

再びエルドラディモンの鳴き声で目を覚ます拓馬たち

その中にはねむそうな顔の舞の姿も

「舞、体はもういいのか」

「ええ、もう大丈夫」

そう言っつて舞は軽く伸びをしたあと部屋をさっさと出て言った

「エデンズジャベリン」

オファニモンの光の槍がオオクワモンを貫いて消滅させた

その夜

「そういえば、エルドラディモンはどこへ向かってるんだ？」

「時期に分かる、が、今はその時ではない」

「またそれが」

マグナモンの答えにあきれる拓馬

「ちゃんとした目的地はあるの、でも、いつ着くかめどが立たないから」

「そうとわかれば、つくまでの間、旅と敵の撃退を頑張るか、四人でな」

「八人だろ」

そう言っつてドルモン達が変わる

「それにプラス1しないかね」

「プラス1とは俺のことか？」

こうして決意を新たにする拓馬たちだった

GATE：24重荷（後書き）

咳っでどうかくの（泣）

というわけで決意新たにした拓馬たち

プラス1とはもちろんんマグナモンのことです（笑）

それでは次回も楽しみにしていただけると幸いです

GATE：25 洗脳（前書き）

ハイ、前回決意を新たにした拓馬たち

果たして今回はどんな戦いが待ち受けているのでしょうか

あ、あと久々に彼らも出ます

GATE：25 洗脳

ベルゼブモンはイスに座って自分の手を眺めていた
「つち」

「どうやらあなたも力を失いつつあるようですね」

「……………デーモンか、何の用だ」

ベルゼブモンのもとに赤いロープのデジモンが現れた

デーモン

多くの悪魔型デジモンや墮天使型デジモンを率いる魔王型デジモン
必殺技はフレイムインフェルノ

「彼らだけでなく、我々も力を失いつつある、既に倒されたりヴァ
イアモンとリリスモンも、七割方力を失っていましたしね」

「本人達気付いてなかったら、俺らの中で弱いほうだったのも事実
だしよお、で、そんなこと言いに来たのか？」

「いえいえ、今回私の傘下のデジモンを刺客として送らせていただ
きました、私も彼らに興味が出てきたのでね」

そう言つてデーモンは不気味に目を光らせ、去って行った

「……………あいつらは俺が倒す」

ある朝、拓馬たちはどでかい振動とともに目を覚ました

「なんだ？」

「エルドラディモンが休憩してるみたい、足をたたんで寝ているわ
町を背負っているのに足をたたむな！」

拓馬の突っ込みむなくそのままエルドラディモンは寝てしまった
「昼夜逆転してるし……………」

「なあ、これっていつ起きるんだ」

朝食を食べながら拓馬が舞に尋ねる

「一度寝たらなかなか起きないから平気だと思っ
そう言つて大皿からパンを一つ取る舞

「本当に大丈夫なんだろうな」

「ごちそうさま」

一足先に食べ終わった舞が退室する

「あ、待つてよ舞」

プロットモンもそれについて行く

部屋をでた舞はその辺をプロットモンと一緒にぶらついていた

「ミツケタ」

「!?!?今の声……………」

「敵だ」

しばらくして卓が敵の反応を見つけた

「……………なんか画面荒くね?」

「確かに、えっと、敵のデータは、ベータモン……………完全体だな、
必殺技は……………」

そこまで言つたところで急に卓の表情が固まった

「なんだよ、どんな技使うんだ?」

「ね、おしえてよ」

「……………悪魔の投げキッス……………」

「「投げキッス……………?」」

そこへ舞が戻ってきた

「あ、舞、敵襲だ、ベータモンだつて」

「……………そう」

戻ってきた舞とプロットモンの表情はどこか妙だった

しばらくして数体のベータモンが襲ってきた

「行くぞ」

FinalGATE open
Evolution

「ドルモン進化」

「パタモン進化」

「ロップモン進化」

拓馬、卓、真琴がそれぞれ究極体へと進化した

「アルファモン」

「セラファイモン」

「ケルビモン」

「ふふふ」

不気味な笑みを浮かべ舞も進化しようとするが

「……………」

D・ウォッチに反応がない

「当然だ、舞……………いや、イーバモン」

「……………どこで気付いたのかしら」

マグナモンが舞の背後にいた

「D・ウォッチの画面が荒れているところでだ、大方特殊な電磁波でも使って自分の反応を消そうとしたんだろうが、迂闊だったな、あれはかなり精密な機械だ、電磁波のせいでノイズが起こって画面が乱れたんだろう、姿を見せたらどうだ、何処かで隠れて操ってるのだろう」

マグナモンがそういうと近くの通路から機械的なデジモンが姿を現した

イーバモン

地球外のテクノロジーで作られたとされる究極体のサイボーグ型デ

ジモン

必殺技はブレインラプチュアー

「残念だったな、電磁波でD・ウォッチのバリアを無効にしたのはほめてやる……だが詰めが甘かったな」

「コウナツタラオマエモアヤツツテヤル！ブレインラプチュアー」

そう叫びイーバモンは左手の銃をマグナモンに発射するが

「隙だらけだ」

あっさりかわされその銃を破壊されてしまう

「アワワ」

「あれ？何してたんだろう私？」

その銃で舞を操っていたのか正気に戻った

「あ！イーバモン！さっき聞いた声はあなただったのね」

「マグナモン？もしかして私たちあいつに操られてた」

「ああ、みごとにな」

「オノレエ」

額に青筋立てながら右手の銃を構えるイーバモン

「プロットモン」

FinalGATE open
Evolution

「プロットモン進化」

舞とプロットモンが交差するリングに包まれ一つになった

「オファニモン」

「プラネットデストロイヤー」

「セフィロートクリスタル」

イーバモンの銃撃を水晶で相殺していくオファニモン

「エデنزジャベリン」

「アワワワ！ウワアアアアアアアア」
オファニモンの反撃を受けて一撃で倒されるイーバモン

「ぎゅあああ」

ベータモンの最後の一匹もアルファモンに倒された

「ああ、キモかった、本当に投げキッスしてきやがって」

「でも、どうしてイーバモンに操られてたときにD・ウォッチが反応しなかったんだろう」

「D・ウォッチは心で進化をもたらす、心を操られた状態では反応しないのも当然だ」

イーバモンを倒し昼食を食べてる拓馬たちにマグナモンが説明していた

「そういえば何か忘れているような」

果物を手に取ったところで拓馬が何か思い出した
そして巨大な振動が

「あの騒ぎのなかつと寝てたのかー！」

昼食はエルドラディモンが起きたシヨックでほとんどがつぶれて駄目になりました

GATE：25 洗脳（後書き）

ハイ、GATE25終了です

しかし風邪ひいたり操られたり最近舞の位置づけがなあ（書いてるのおまえだろ）

何気に舞の進化バンク初登場

それでは、次回GATE26を楽しみにしていただけると幸いです

GATE：26 迷宮（前書き）

というわけでGATE26です

なんか最近シリアス多めな気がしたんで緩めに行きます

GATE：26迷宮

ある朝、急にエルドラディモンが立ち止ったため朝食がだめになりました

「マグナモン」

「何があったの？」

拓馬たちがマグナモンを訪ねると彼は神妙な顔で外を眺めていた

「厄介なところに来てしまったな、霧の森か」

「霧の森？」

「どうやら舞も知らないようだが」

「ここは七大魔王の配下のデジモンが支配するエリアでな、常時霧が出ていてその霧が旅人を惑わすんだ」

「なら避けて通れば」

「ところがそうもいかない、どうやら夜中のうちに間違っ入りこんでしまったらしくてな、既に霧の中だ」

「「気づけよ!!!」」

「とりあえず外の様子を見てきてくれ、目立つといけないからお前たちの中から二人な」

「おいマグナモン、それって俺ら入ってんのか？」
デジモン達

「なあ、飛んで出ること出来ないか？」

「さっき私もそう考えてリリモンに飛んで行ってもらったがいつのまにか戻ってきていた」

「どうやら上から抜けだそうとするといつのまにか戻ってきてしまうらしい、何ともありがちである」

「じゃんけんの結果舞と卓が見に行くことになった」

「とりあえず地図を確認しようか」

そう言つて卓がD・ウォッチの地図を取り出すと

「磁場が強いみたいね」

「はは、肝心な時に役立たねえなこれ」

ザーザー言つて画面が映らない

「そつえばこんな状態で進化できるのか？」

「たぶん問題ないと思う、前にもこんなふうになったことあつたし、こつ言つときこつちの世界長い舞がいると便利だ」

「つてあれ？」

「どうしたパタモン？」

「エルドラディモンが居なくなつてる……………」

舞達が振り向くとすぐ後ろにいたはずのエルドラディモンがいない
「てかここ、どこだ？」

完全に迷子になつてしまつた二人と二匹だつた

「あれ？舞たちどつかいつちやつたわよ」

エルドラディモン側のほうも異変に気付きあたりを見回すと

「……………つて言つかなんか囲まれてるぞ！」

ブラックメガログラウモン

上半身が最強金属“クロンデジゾイド”でメタル化されている完全
体のデジモン

必殺技はアトミックブラスター

「どつやら俺達は招かれざる客らしいな」

「手を離さないで、はぐれたら元も子もないから」

「平気、ちゃんと掴んでる」

ちなみにプロットモンは舞の空いてるほうの手に抱かれ、パタモン
は卓の頭の上にいる

ちよつとでも離れたらさつきみたいにはぐれる危険があるからだ

「あ……………」

「どうした？」

急に舞が腕を引っ張るので卓が彼女のほうを向くと、目の前に立ってた木に思いつきりぶつかった

「前……………って言おうと思ったんだけど」

「遅いよ」

「卓大丈夫？」

「セイヤ！」

アルファモンがブラックメガログラウモンを一体切りつけるも彼らは次々現れる

「妙だな？ブラックメガログラウモンは個体数の少ないデジモンのはずだが、それに連中なぜ攻撃してこない……………」

と、マグナモンは疑問に思っていた

「あ……………」

舞が再び卓の腕を引っ張ると卓は足を止めてから彼女の方に振り向いた

「今度は何？」

「あれ」

そう言つて舞が指差した先にはなんか木みたいなのが三体

「あれは？」

「ウッドモンよ、七大魔王の傘下の雑兵」

ウッドモン

枯れた大木のようなデジモン

必殺技はブランチドレイン

「捜せ、このあたりに例のガキ連中がいるはずだ」

ウッドモンの一匹がそう言ってるのが聞こえて舞と卓はお互いを見る
「ね、私に考えがあるんだけど」
「奇遇だな、僕もだよ」

二人はしばし相談した後わざと茂みから派手に倒れ込んだ

「おなかすいた〜」

「もうだめだ〜」

下手な芝居もいいところだが

「おい、こいつら例の」

「うわ、腹の音すげえな」

「生き倒れになったんだな！大手柄だぞ」

腹が減っているのは本当だ、今朝の騒ぎで朝ご飯食べ損ねたのだから

「ねえ、おなかすいた〜」

「だ〜！しょうがねえな」

ぶーたれる舞に嫌気がさしたのか彼女たちを連行している最中にウッドモン達はその辺の果物をもいで渡した、因みにつながれてるので舞たちは逃げられない

「てか、食べにくい」

まあ両手縛られてるし

「ジュレイモンさまー！」

ウッドモンがどでかい大樹みたいなデジモンのもとへ舞達を連行した

ジュレイモン

深く暗い森に迷い込んでしまったデジモンを更に深みに誘い込み永遠にその森から抜け出せなくしてしまう恐ろしいデジモン
必殺技はチェリーボム

「よくやった、残りの二人はワシのほうで何とかする、お前らは戻

つて……………」

と、ジュレイモンがここまで行ったところで舞の縄が突然切れた
「な！」

彼女の手にはカッターナイフが、どこに隠し持ってたんだか

「げげ！」

「何をしている！早くとらえろ！」

「ファイナルゲート、オープン！」

FinalGATE open
Evolution

「プロットモン進化！」

舞とプロットモンが交差する輪に囲まれ一つになる

「オファニモン！」

「おゝい、僕の縄といてからにしてくれ〜」
忘れられた卓達だった

「しまったー！そっぴいえばD・ウォッチ取り上げとくの忘れたー！」

「馬鹿もーん！早くとらえんか！」

と、ジュレイモンが命令したところでウッドモンが一瞬のうちに全滅
まあ成熟期だから当然だが

「おのれ！こうなればワシ自らの手で！チェリー……………」

「エデンスジャベリン！」

そしてボスのジュレイモンもあっさり倒された

「俺何のために出てきたんだ！」

「ムググ……………あ、取れた！」

まだ縄相手に格闘していた卓達だがようやくパタモンが噛みきって

縄がほどけた

「ふう、大したことなかったわね」

「まったくだ、僕必要なかったじゃん」

「なんで泣いてるのかしら？」

「あ、霧も晴れたみたい」

一方拓馬たちのほうはというと

「なるほど、幻覚だったから数が減らなかったのか」

「のんきだなおい」

大量のブラックメガログラウモン相手に戦っていたつもりでフルパワーだしまくっていたので疲労困憊の二人だった

「結局D・ウオッチの故障もあの霧が原因だったのね」

「ああ、あの霧にはイーバモンが使ったのと同じ電磁波の成分が含まれていたようだ、ところで拓馬、ちょっと話がある」

「ん？なんだよ」

果たして話とは一体

GATE：26 迷宮（後書き）

というわけでGATE26終了です
終わり方中途半端ですがそれは次回以降補完しますんで大丈夫です
そんなわけですからGATE27を楽しみしていただけると幸いです

GATE：27 遺跡（前書き）

さて、今回はどんな敵が待ち構えているのでしょうか
それでは今回も楽しんでいただけると幸いです

GATE：27 遺跡

拓馬はマグナモンとともに彼の部屋にいた

「おまえたちの世界では、失踪後七年以内ならまだ戸籍が存在する」
死亡届が出ていない場合

「舞は本来ここにいるべきではない、この戦いの後、お前たちとともに元の世界に戻ってもらうつもりだ」

そう言つてマグナモンは彼になにかさしだした

「舞の母子手帳だ、これはお前が持っていてくれ」

「ああ、分かった」

そう言つて拓馬は神妙な顔つきでポケットにしまう

「そろそろ目的につく、先に戻っていてくれ、他にも渡すものがある」

マグナモンに渡されたのは新しい服と鞆だった

「前の服はボロボロだったし鞆がないと話にならないだろう、流れ込んだ服の素材を合わせて作ったものだ」

「なんで全員同じデザイン？」

「お約束というやつだ」

「なんかお前キャラ変わったな」

赤を基調に白いラインの入ったその服は男子はシャツと長ズボン、女子はワンピースといった感じに仕上がっていた

「ちなみにデザインはリリモンに手伝ってもらった」

「そう………」

翌日

「ほら、起きる」

朝っぱらからマグナモンが訪ねてきた

「フローラモンに頼んで前の服をつくろいなおしてもらった、鞆に

しまっておけ」

因みに拓馬がマグナモンから受け取った母子手帳はすでに鞆にしま
つてある

「それと、目的地についたようだ」

マグナモンの案内で三人が外に出てみるとなんかインディアンとシ
ーサーを足して二で割ったようなのが騒いでいた

バロモン

寺院の遺跡データベースの守護神とされるデジモン

必殺技はメテオダンス

「何事だ！なぜエルドラディモンがここに」

「私が連れてきた」

そう言つてマグナモンが飛び下りる

「で、例のデジモンの力が眠るとされる遺跡はここだな」

「ロイヤルナイトノ一人、マグナモンですな、あなた方がお求めの
ものは確かにこちらに」

「そうか、行くぞ、お前達、バロモン、お前はここで

「は

マグナモンの先導で遺跡の中へ入っていく拓馬たち

「一体ここはどこなんだ？」

卓が暗い通路の中マグナモンに問う

そもそもマグナモンから目的地について説明を受けていない

「それを話すためには進化のメカニズムについてもう一度説明する
必要がある」

階段を下りながらマグナモンが話し始めた

「そもそもD・ウオッチで進化できるのは、そのデジモンに適合し
た心を持つ人間の力が必要だ、舞は力を失ったオファニモン、今の
プロットモンに適合した心を持つていたため選ばれた」

「そう、そのことは前に聞いた」

「俺達は聞いてないぞ」

そのことに関しては舞が知っていた様子

「そしてアルファモンの力は、もともと持っていたものでさえ、不完全だったんだ」

「は？それってどういうことだ」

「ベルゼブモンにはもうあったな」

ドルモンがきくとマグナモンが七大魔王の一角の名前を出した
確かにベルゼブモンは以前戦ったことがある

「その時やつが形態を変化させただろう、アルファモンにも同様の力が存在する」

以前見たブラストモードのことだろう

「だがかつてのアルファモンはまだその力をものにしていなかった、ここはそのカギを握る伝説のデジモンが眠る地だ、かつてロイヤルナイツのリーダーだった、アルファモンの力をさらに高める可能性を秘めた場所だ」

「俺、そんなとんでもないデジモンに適合してたのか……………」

「エルドラディモンよ、お主には、何が見えるのだろうな」

バロモンがエルドラディモンをながめ呟くと、何かの殺気にきがついたのかうしろをむく

「貴様は……………」

「ここだ」

聖堂のような場所につくと巨大な壁画が描かれていた

「ここが“オウリュウモン”の眠る場所だ」

GATE：27 遺跡（後書き）

ハイ、まあアルファもん出て来た時点で想像してた人いたでしょうけど

オウリュウモンとは一体

果たしてアルファモンは新たな力を手にすることが出来るのか
次回も楽しみにしていただけると幸いです

GATE：28 怠惰（前書き）

ハイ、前回アルファモンが更に強くなる可能性を秘めた事が開かされたわけですが

無事、新たな力を手にすることができるとか

そして前回バロモンを襲った敵は一体何者なんでしょう

GATE：28 怠惰

「オウリユウモン？」

「伝説のデジモンだデジコア。電脳核の空想によって生み出され、自らのその強大な力を封じるため、太古の昔この地で眠りについたといわれる」
マグナモンはそう言って壁画に触れる

「力を借りようと我々は眠りについたオウリユウモンの居所を探していたが、なにぶん手がかりがなく、当てのない旅を続けていたというわけだ」

「で、目覚めさせる方法は？」

マグナモンに卓が塔と意外な答えが

「知らん！そもそも場所がわかったのも偶然だしな」

「意味ねえじゃねえか」

と、拓馬が突っ込み入れたところでなぜか爆音が

「なんだ？」

「俺の突っ込みか？俺の突っ込みなのか？」

「兄さんパニくらないで」

「まさか、このようなことになるうとは」

そう言っつてバロモンが粒子となり消滅した

近くにはエルドラディモンの中で暮らしていたたくさんのデジモンが倒れており次々粒子となって消滅した

「どこだああああああ！D・ウオッチの子供たち！」

おぞましい獣のようなデジモンがマーメイモンの頭をつかみながら叫んだ、その足元にはエルドラディモンが横倒しになっている

ベルフェモン

怠惰をつかさどる魔王型デジモン

必殺技はランプランツス

「グ……………チャームプランダー！」
「マーメイモンがつかまれないながらもベルフェモンを攻撃するが……………」
「あ？今何か当たったか？」
「蚊ほどもきいていない、力の差がありすぎるのだ」
「たくつまんねえな、さつさとでてこいやあ！」
そう言つてマーメイモンは地面に強く叩きつけられ消滅した

「なんとということだ」

ちよつどその時大慌てで遺跡から出た拓馬たちが到着した

「酷い……………」

「お、やつときやがったか、苦労したぜ、このデカブツを倒すのを、我慢するのをなあ！」

そついいながらベルフェモンの周りの鎖が動き始める

「ランプランツス！」

その鎖がエルドラディモンの巨体を貫き、そのまま消滅させた

「へ、これで全部か」

「……………ファイナルゲート！オープン……………」

ベルフェモンがそついうのと進化した四人が突つ込むのは同時だった

「ベルフェモン！お前だけは許さない！」

そう言つてアルファモンがベルフェモンに切りかかる

「やるな、だが俺の敵じゃない！」

そう言つてアルファモンを退けたベルフェモンの前に今度はオフア

ニモンとケルビモンが

「エデنزジャベリン」

「ヘブنزジャツジメント」

二人の大技が炸裂するもベルフェモンは平気な顔だ

「今まで戦つた魔王型デジモンとは力が違いすぎる」

「一体どうなつてるの」

「一つだけ可能性が考えられる」

アルファモン、ケルビモンの二人が疑問視する中、セラフィモンが一つの事実にとどり着いた

「いままで僕達が戦った魔王型デジモンが、マグナモンと同じく完全な状態じゃない、力を失ったデジモンだとすれば」

まあ、読者の皆さんは前にベルゼブモン達が話してるの見てしつてると思いますが

「察しいいな、その通り、そして俺様は力を失っちゃいねえ、いわばこれが魔王の真の力だ」

そう叫びながらベルフェモンが放った一撃で天使デジモントリオは気を失ってしまう

「そんな、まさか……………」

果たしてアルファモンはこの強敵相手に戦えるのか

GATE：28 怠情（後書き）

ハイ、28話終了

因みにオウリユウモンの設定は一部捏造しました

いやー、ベルフェモンって結構使いやすいなあ、セイバースとポジシヨン微妙にかぶってるけど

というわけでベルフェモンの襲撃でエルドラディモンの集落が壊滅果たして拓馬は勝てるのでしょうか

次回も楽しみにしていただけると幸いです

GATE：29 光臨（前書き）

さて、前回完全な力を持つ七大魔王

ベルフェモンとの戦いに突入したわけですが

いきなり三人倒され大ピンチ

果たして拓馬はこの強敵に打ち勝つことが出来るのだろうか

GATE：29 光臨

アルファモンがベルフェモンの攻撃をかわしながら攻める隙を探しているが

「はあああ」

いくら切ろうともベルフェモンは平然としている

「力が違いすぎる、今のおれたちじゃ」

一方七大魔王のアジトでは

「今残ってるのはこれだけか」

そう言っただけでバルバモンが周りを見る

デーモンとベルゼブモン、ルーチェモン、そして彼だけが残っていた

「ベルフェモンが連中を倒しに行ったからな……」

そういうベルゼブモンの表情は何処か悔しそうだった

「アルファモン………奴は俺が倒す」

そう呟きベルゼブモンが拳を握る

「まだ、完全な力を持った七大魔王と戦うのは無理か」

マグナモンはしばし考え込んだ後何かを決意したような眼になる

「そら、ランプランツス」

チェーンがアルファモンに迫る、回避は間に合いそうにない

「プラスマシユート」

が、突如現れた光球がチェーンを阻んだ

「俺が相手だ、ベルフェモン」

マグナモンがベルフェモンの前に現れる

「な！マグナモン、お前」

「おまえは三大天使デジモンのメンバーを起こせ、俺が死んでも、奴らが戦うことが出来れば」

「……………わかった」
アルファモンは降り立って進化したまま気絶してるオファニモン達のもとへ

「エクストリームジハード」

マグナモンから放たれた輝きがベルフェモンの動きを止めた

「ツク、限界が……………」

「なめるなああああああ！」

ベルフェモンの咆哮でマグナモンの光が打ち消された

「ランプランツス」

ベルフェモンのチェーンがマグナモンを吹っ飛ばした

「ツク、ここまでか」

「エデنزジャベリン」

とどめを刺そうとしたベルフェモンにオファニモンの光の槍が突き刺さる

「大丈夫か、マグナモン」

マグナモンを寝かせるセラフィモンとケルビモン

「すまない、俺はもう駄目だ、今まで迷惑かけたな」

そうい呟くマグナモンの体は次第に消えかけていた

「必ずこの世界を……………救ってくれ」

そう遣し、マグナモンは消滅した

アルファモンの斬撃をベルフェモンがチェーンで防ぐ

が、そのチェーンにひびが入った

「馬鹿な！さっきまでとパワーがまるで違う」

「やつらは思いで強くなる、マグナモンの野郎が託した思いが、連中をさらに強くした」

「セフィロートクリスタル」

水晶が次々ベルフェモンに降り注ぎ

アルファモンがそのすきに剣を横に構える

「これが！この世界を救いたいという！おれたちの思いだ！」

アルファモンの剣が輝き、ベルフェモンの胸を真一文字に切りつけた

遺跡の地下

この戦いのさなか崩れ始めた遺跡の壁画、オウリュウモンの瞳が開き、輝いた

「その思い、受け止めた！」

そして壁画が完全に崩れ、金色の光が羽ばたいた

「エデンズジャベリン」

オファニモンの光の槍がベルフェモンの傷口に刺さり

ベルフェモンが膝をついた

「セブンスヘブンス」

「ライトニングスピア」

セラフィモン、ケルビモンが追撃を加え、アルファモンがとどめを刺そうとすると、突如雷鳴がとどろく

「強き思いを持つ者よ、その思い受け止めた」

そして巨大な刃を持つ金色の龍が姿を現した

「わが名は………オウリュウモン」

GATE：29 光臨（後書き）

ハイ、GATE 29 終了でございます

え？アルファモンのパワーアップ？

あ、それは後のお楽しみということ

ベルフェモンとの戦いはたしてどうなるのか
次回も楽しみにしていただけると幸いです

GATE：30 覚悟（前書き）

さて、前回ついに伝説のオウリュウモンが姿を現し
ベルフェモンも追い詰めいよいよ佳境に近づいていますね

GATE：30 覚悟

「こいつが……………オウリユウモン」

オウリユウモン

王竜伝説となつて語り継がれる存在であり旧DWの“神”とも呼ばれるデジモン

必殺技は永世竜王刃

「永世竜王刃！」

オウリユウモンの刃がベルフェモンに炸裂

「いまだ！強き志を持つ者よ！」

「いわれなくても！」

刃を喰らい虫の息となつたベルフェモンにアルファモンが斬りかかり
一刀両断、強敵ベルフェモンを倒すことに成功した

「ありがとう、オウリユウモン」

「アルファモン、我と共鳴する力をもつものか」

進化を解いた拓馬達がオウリユウモンに礼を言っているとオウリユウ
モンが拓馬とドルモンをみた

「そのかくご、今一度確かめさせてもらおう」

「…はい？」

「ぎゃあああああああああ」

オウリユウモンの巨大な刃が拓馬とドルモンの鼻先をかすめた

「勘違いするな、お主たちの覚悟を受け止めたとはいつてもお主た
ちに協力するとは言っていない」

「つまり……………戦つて覚悟をもう一度証明しろってことか」

「おもしれえ！拓馬！進……………ってうおい！」

進化する隙を与えようともせずオウリュウモンが立て続けに攻撃してくる

その攻撃に拓馬とドルモンは逃げるしかなかった

「進化どころじゃねえ！むちゃくちゃだよ！」

一方卓達はというと

体力回復に効く木の実を近くで見つけたためそれをかじりながら様子を見ていた

本当は拓馬たちに助太刀したいのだが

「さっきの戦いのダメージで僕たちも進化どころじゃないよお〜」

「ほら、パタモンも食べなよ」

「覚悟なら私たちが一番だと思っただが」

「うん、そうだね……………」

「真琴暗い顔になった」

「ロップモン、地雷踏んだ」

「まさかベルフェモンが敗れようとは、オウリュウモンの力、なんと恐ろしいものだ」

「ですが、今肝心のオウリュウモンは彼らを試している段階のようですね」

バルバモンとデーモンが話し合っている

「あれ？ベルゼブモンどこ行くの？」

「野郎と決着をつける」

「困りますね、あなたにはここに残ってもらわないと、このダークエリアに」

デーモンが外を見る、紫色の雷がとどろく、闇に覆われた世界だ

「ひい、ひい、何とかまいたみたいだな」

「てか、よくにげられたな」

森の中でばてばての状態になる拓馬とドルモン、オウリュウモンは

そんな二人を隠れて眺めていた

「ファイナルゲート！オープン！」
アルファモンに進化した拓馬たちはさっそくオウリュウモンの気配を探る

「そこだあ！」

近くの木に向けて剣を振り上げるが

「！」

何かに気付いて剣を止める、するとその木からミノムシのようなちっちゃいデジモンが出てきた

ミノモン

硬い殻に入っているもぼーっとしているデジモン

「ミノモンの存在に気付いたか」
オウリュウモンが木の陰から姿を現した、てかどうやって隠れてたんだ

「はあ」

広い所にオウリュウモンを誘い出し剣を交えるアルファモン

「筋もいい、先ほどの覚悟、そしてミノモンの存在に気付いた判断力……………」

「どうやらこの先の草原みたいだな」

卓達がD・ウオッチのリーダーを頼りにアルファモンを追っていると

「ん？別の反応が……………」

巨大な鳥の影が三人を覆った

「つく」

オウリュウモンにはじかれ後ろに退く

「今一度問う、主が力を欲するのは何のためだ」

「この世界を……デジモン達を守りたい」

「なぜ」

「ライラモンが死んで、真琴が背負った悲しい思い、マグナモンが死んでわかったんだ、俺はその思いを、他の罪のないデジモンに背負わせたくない！マグナモンが戦ったとき何もできなかった悔しさを！」

「……よかろう！その思いが本物なら！この刃！うち砕いてみよ
オウリユウモンが高く飛びアルファモンが剣を構える

「永世竜王刃！」

「グレイダルファー！」

「あそこだ」

ガルダモンの腕の中で卓達が草原に立つアルファモンを見つけた

「おい拓馬ー！」

アルファモンには翼が生え、今までとは違う立派な刃がその手にあった

GATE：30 覚悟（後書き）

ハイ、というわけで

また思いの強さでパワーアップですww

完全体のときは心を一つにして

究極体のときは強い決意が

そして今回のパワーアップは強い覚悟がカギとなったわけですが、パワーアップしたアルファモンの活躍に期待しててください。では次回も楽しみにしていただけると幸いです。

GATE：31判明（前書き）

ハイ、前回無事パワーアップを遂げたアルファモンでしたが
一個突っ込みどころありましたよね
なんでガルダモンいるんだ？って
今回その辺含めて話が發展します

GATE：31判明

「よかつたな拓馬、オウリユウモンに認めてもらうことが出来て」
「んゝ二割くらい真琴のおかげかな？」

「え？それどういうこと？」

「おしえない」

と、四人と四匹が休んでいる

「本当によかつたですね」

「……………あのさ、さつきから気になってたけどなんでガルダモン
いるの？てか久しぶり」

「久しぶりですね、じつは……………」

ドルモンの問いに答えるガルダモン

「「ええええええ！」」

草原に拓馬とドルモンの叫びがこだまする

「本当か！七大魔王の居場所が分かつたって！」

「といつてもベルフェモン倒したからあと4人か」

「そのうち一人はきつとベルゼブモンだよ」

と、一部いきり立つるところで

「で、どこにいるの？」

肝心の場所をまだ聞いていないため舞がガルダモンに問う

「はい、ダークエリアと呼ばれる場所に、七大魔王の城があること
が、私たちの調べで分かっています」

「ダークエリア、デジタルワールドと並行して存在する、闇に包ま
れた場所、別次元の空間だって、マグナモンに聞いたことがあるわ
どうやらプロットモンはダークエリアの存在を知っているようだが
「でも、そんな場所そうやっていけば……………」」

「はい、ダークエリアは本来闇のデジモンのみが通れる道」

「なーに、簡単だ」

拓馬が話を聞いて立ち上がる

「行くぞ」

アルファモンに進化して剣を地面に突き刺す

「あいつらの世界はこの世界と並行してる、つまりこの世界の裏側みたいなもんだろ」

「それはそうだけど」

「だったらこうするぜ、開け！デジタルイズオブソウル！」

アルファモンの叫びとともに魔方陣が地面に空間の穴をあけた

「凄い」

「こいつを通ればいけるはずだ」

こうして全員がダークエリアの扉に念の為進化して突入した

ダークエリア

闇に包まれたこの空間に突然魔方陣が出現し

「わあ！」

拓馬たちが投げだされた

「ったー、空間の穴通るだけで負担が大きいわね、進化解けちゃった」

「生身じゃ持たなかったわね、きつと」

「戦いが終わったら、あの技で元の世界に帰れるかと思ったんだけど、あの衝撃じゃ元の世界に帰る前に死んじゃうな、きつと」

「いいから降りてくれないか」

拓馬、舞、真琴の三人に下敷きにされる卓だった

「あそこに残りの七大魔王デジモンが」

と、ここでなぜか拓馬だけがオニスモンにさらわれた

「つてうわ！なんじゃこりゃあぁ……………」

「まずい、行くぞ！」

オニスモンを覆うとする卓達だが

「そうはさせませんよ、ベルゼブモンが彼を相手するといっけてきかないのでね」

その彼らの前にバルバモンが立ちふさがる

オニスモンは砂漠みたいところで拓馬たちをおとしてった

「アルファモンさんよお」

そんな彼らの前に立ちふさがるのは

「いつかのケリ、つけようや」

かつて戦ったベルゼブモンだった

GATE：31判明（後書き）

ハイ、というわけでそれぞれバルバモン、ベルゼブモンとの戦闘開始ですね

ベルフェモンに全くなかった彼らですが果たして
それでは次回も楽しみにしていただけると幸いです

GATE：32 因縁（前書き）

いよいよダークエリアでの決戦に突入しました
舞達はバルバモンと

そして拓馬はベルゼブモンとの戦いに突入です

GATE：32 因縁

「セブンスヘブンス」

セラフィモンの攻撃がバルバモンに向かう

バルバモンはたやすくよけセラフィモンに接近するが

「ライトニングスピア」

セラフィモンが横に飛んで後ろに控えていたケルビモンが攻撃を仕掛ける

が、バルバモンが上に飛んでこれもよけられる

しかし飛んださらに上にオファニモンが待ち構えていた

「エデンスジャベリン」

真下のバルバモンに向かってオファニモンが攻撃するが

「バンデモニウムロスト」

オファニモンの光線にバルバモンが自分の光線をぶつけて相殺した

「昔とはまた違う、なかなかやるではないか」

着地したバルバモンの口ぶりからしてかつての彼らを知ってるようだが

「どういうことだ、舞」

「昔オファニモン達が力を失ったときに戦ったのが、あのバルバモンだったの」

「ダブルインパクト」

ベルゼブモンの銃弾をアルファモンがよけ一気にベルゼブモンに接近する

「グレイダルファー」

アルファモンの攻撃をベルゼブモンは後ろに飛んで避けた

「おまえの攻撃は前に一度直に喰らってるからな、もう喰らわねえよ」

「セフィロートクリスタル」

オファニモンがバルバモンに水晶弾を撃ち込むが、バルバモンは再度上に飛んで避けた

「ヘブンスジャツジメント」

「デイバインブレイカー」

が、空中で待機していたセラフィモンとケルビモンが挟み撃ちで攻撃する

するとバルバモンは両腕をそれぞれの攻撃へと向けた

「バンデモニウムロスト」

バルバモンの攻撃でセラフィモン、ケルビモンの攻撃は相殺されてしまうが

「エデンスジャベリン」

下から再度オファニモンが狙い打つ、更に

「ヘブンスジャツジメント」

「デイバインブレイカー」

再度セラフィモンとケルビモンがバルバモンを狙い打つ
攻撃後の隙をついた三方向からの挟み撃ちだ

「現れよ、地獄の火炎」

バルバモンがそう呟くと彼の杖が光った

「グレイダルファー」

アルファモンの剣が空を切りベルゼブモンが背後から迫った

「ダークネスクロウ」

ベルゼブモンが爪を振り下ろすもとっさにアルファモンは剣でガードする

「あーあ、ベルゼブモンってばムキになっちゃって」

ルーチェモンが足をふらふらさせて戦闘の様子を水晶玉を通して見
ていた

「ま、せいぜいがんばってほしいな………ぼくの為にも」

今まで無邪気な顔を見せていたルーチェモンが黒い笑みを浮かべた
果たして彼は何者なのだろうか

バルバモンの杖から放たれた炎が周囲を焼き尽くしていた

オファニモン達も吹っ飛ばされて近くで倒れている

「っ、強い」

「こいつも、完全な状態で力を残しているのか」

ケルビモンとセラフィモンが立ち上がるうとする

一歩早くオファニモンが前に出た

「エデنزジャベリン」

「バンデモニウムロスト」

が、負傷した状態でフルパワーの技は打てず先ほどまで相殺しあつた技は撃ち負けてしまった

「く」

再度吹っ飛ばされたオファニモンにセラフィモンとケルビモンが駆け寄る

「オファニモン、僕に一つだけ、考えがある」

「ダブルインパクト」

ベルゼブモンの銃撃をアルファモンが剣でガードし再度突っ込む

「グレイダルファア」

が、剣撃を当てる事が出来ずお互い決定打がない

「そろそろこつちも全力で行かせてもらうぜ」

そういつてベルゼブモンは自らに黒いオーラを纏わせた

「ベルゼブモン、ブラストモード」

以前も見た形態だ、この状態になるとベルゼブモンはパワーが上がる

「こつちも行くぞ」

アルファモンの言葉とともに金色のオーラがまとう

「王竜剣！」

オーラが消えたのち、アルファモンに巨大な剣と翼が纏われた

「いつけー！」

その巨大な剣でアルファモンが衝撃波を発生させると
見当違いの方向に飛んでいき大爆発した

「……………あれ？」

「どうやらその力をまだコントロールできないみたいだな」

ベルゼブモンはそういいながら右腕の銃を構える

「カオスフレア」

ベルゼブモンの巨大な銃から放たれたレーザーがアルファモンを包
んだ

GATE：32 因縁（後書き）

はい、というわけで王竜剣初登場（正確に言つと覚悟の時であらうと出てる）ですが

いきなり大ピンチ

果たして王竜剣を制御できるのか

そしてセラフィモンの考えとは

次回も楽しみにしていただけると幸いです

GATE・33逆転(前書き)

はい、というわけで

めっちゃくちゃ苦戦しております

果たして拓馬たちは無事勝利することが出来るのか

GATE：33 逆転

「終わりだ、D-ウォッチに選ばれし者たち」

そういつてバルバモンが再び技の構えに入る

「バンデモニウムロスト」

オファニモン達は今一か所にかたまっている、今攻撃を受けるとま
ずいが

「アセンションハーロー」

セラファイモンがとつさに落とした雷で地面にたたきつけてくれたお
かげで事なきを得た

「ならばこれならどうだ、現れよ！地獄の火炎」

バルバモンの杖が輝き、そこから現れた炎がセラファイモン達を包み
込む

「やるじゃねえか」

ベルゼブモンの視線の先には剣を使って先ほどの攻撃を防いだアル
ファモンの姿が

どうやら剣そのもののスペックは高い様子

「大技がきかねえなら」

そういつてベルゼブモンは軽く足を鳴らし

「戦い方を変えるだけだ」

アルファモンに向かって飛んできた

「ダークネスクロウ」

まず正面から突撃すると

「これならどうだ」

上空からアルファモンを狙う

「くそっ」

なんとか剣を持ち上げるアルファモンだったが

「甘いぜ」

続けざまにベルゼブモンが攻撃を放ち、だんだん支えられなくなってきた

「これで終いだ」

そういつてベルゼブモンの放った攻撃でアルファモンがふらついたそのタイミングを狙ってベルゼブモンが正面から向かってくる

「ダークネス……………」

「なめるな」

アルファモンがギリギリのタイミングで飛んでかわしベルゼブモンの攻撃は空を切った

するとすれ違いざま、アルファモンの剣が下を向いたためベルゼブモンの背中を直撃した

「があ」

「今の……………」

「終わったか……………」

そういつてバルバモンが立ち去ろうとすると、突然地獄の炎の一部がはじけ飛んだ

「何!？」

どうやらオファニモンが結界を張って炎を防いでるようだ

「地獄の火炎を防いだことはほめてやろう、だがその結界の中では反撃できまい」

たしかに結界を解こうとすればたちまち周りで燃える地獄の火炎が襲いかかってくる

それに狭い結界の中で下手に攻撃すれば危険だ、自滅する可能性が高い

「これで本当に最後だ、特大のバンデモニウムロストを喰らうがい」

今までより大きな光線がオファニモン達に向かう

このサイズだとおそらく結界は役に立たないだろう

「終わりだ!三大天使デジモン!」

「……………まだ」

そう呟いてオファニモンが結界を解いた

「終わりじゃない！エデンスジャベリン」

「デイバインブレーカー」

「ヘブンスジャツジメント」

三人が極端に近い位置から光線を放った

するとどうだろう、三人の光線が一つの巨大な光線となりバルバモンの攻撃を打ち破った

「馬鹿な！まったく違う技が一つになるなど」

「まったく違う技じゃない」

バルバモンの驚愕の声をセラフィモンがさえぎった

「僕たちの光は、ほとんど同じ性質のものだったんだ」

セラフィモンがそういうのと同時に彼らの光線がバルバモンに直撃し、その姿を光で覆った

「どうした！アルファモンさんよお」

ベルゼブモンが小さい方の銃でアルファモンを狙撃しながら叫ぶ

「防いでばっかじゃ俺には勝てねえぜ」

「……………」

アルファモンのほうは先ほどから剣でベルゼブモンの攻撃を防ぐばかりだ

すると次の瞬間、ベルゼブモンの弾丸がアルファモンの剣に小さな亀裂を入れ、めり込んだ

「いくらその剣が強力かつ頑丈でも、同じか所に攻撃を続けられたら持たねえよな」

そういつてベルゼブモンは右腕の巨大な銃を構える

「喰らえ！カオスフレア」

当然ベルゼブモンの狙いは先ほど入った亀裂、そこを狙い打てばアルファモンの守りを打ち崩せると踏んだのだろう
ところがアルファモンは突然姿を消した

「なに！？」

「その技結構隙が大きいからな」

アルファモンはベルゼブモンの真上にいた

両手で必死に剣を支え技を発動させるところのようだ

「無駄だ、たとえさっきの衝撃波を打ったところで、てめえはまだ狙いが……………！！」

「真上からなら、重力で真っすぐ飛ぶよな」

そういつてアルファモンは剣をふるい衝撃波を放つ

「なめるな！カオスフレア！」

すぐ攻撃を中断して衝撃波を打ち消しにかかるベルゼブモン

しばらく互いの攻撃がぶつかり合った後

互いの技が消滅した

「……………はは、ざまあみやがれ、俺の勝ちだ！」

ベルゼブモンが歓喜の叫びをあげていると、アルファモンが彼のす

ぐ正面、至近距離にいつの間にか立っていた、剣を構えている

「しまっ」

「この距離ならいくらなんでも当たるとよな」

アルファモンの攻撃で放たれた衝撃波がベルゼブモンを吹っ飛ばした

「こいつ、最初からこれを狙って」

心中でそう呟いたベルゼブモンの口元が一瞬緩んだ

「敵わねえ」

GATE：33 逆転（後書き）

まあ、あれですね

ケルビモン出番すくねえ

なにはともあれ無事バルバモンとベルゼブモンを撃破

残りは2体、はたして彼らの実力とは

次回も楽しみにしていただけると幸いです

GATE：34 憤怒（前書き）

というわけでベルゼブモンとバルバモンを前回撃破
ただいまだに王竜剣を制御できないまま
果たしてこの先一体どうなるのでしょうか

GATE：34 憤怒

ベルゼブモンがボロボロの状態で落っこちてきた
ブラストモードも解けている

「はあ、はあ、か、勝った」

そういつてアルファモンの進化が解除された

「とにかく、これで……………どわぁ！」

なんとベルゼブモンが立ち上がって拓馬たちの目の前に現れた

「ま、まだやるきか」

「安心しろ、俺はもう戦えねえ……………今はな」

「今は？」

ベルゼブモンの言葉に疑問を覚える拓馬

「俺はこの戦いから手を引く、そしていつかお前たちに勝つ……………」

それまで、誰にも負けるんじゃないやねえ……………お前名前は？」

「俺はドル……………」

「お前じゃねえ、人間のほうだ」

ドルモンが名乗ろうとするもベルゼブモンがさえぎる

「拓馬、宮原拓馬」

「拓馬、次あつた時は必ず倒す……………！」

ベルゼブモンが去ろうとしたとき拓馬に向かって巨大な人玉のようなものが飛んできた

「くそっ！」

「勝ったのね、私達」

戦闘のダメージと極度の疲労で倒れ込んでる舞達

「ああ、過去を乗り越えたんだ」

いいこと言ってるけど地面に突っ伏した状態なので台無しである

「大変！」

「どうしたんですか？若槻先輩？」

「今、アルファモンの反応探してただけど、ベルゼブモンのほかに！魔王デジモンの反応が！アルファモンの進化も解けてる」

そういつてD・ウォッチの画面を見せる真琴

確かに二つの大きな反応と小さな反応が一つ映っていた

「大変だ！パタモン！」

「待つて！さっきの戦いのダメージでデジモン達はまだつかれきってる、ここは兄さんを信じて、プロットモン達の回復を待つてから向かいましょう」

冷静に告げる舞だがその表情には焦りが見えた

「……………いまのは……………！ベルゼブモン！」

拓馬を庇う形でベルゼブモンが攻撃を受けていた

「どうして俺を！」

「言つたる、お前を倒すのは……………この俺……………だ」

そこまでいつてベルゼブモンは倒れた

「お前！どういっつもりだ！」

拓馬の視線の先には赤いフードのデジモン……………デーモンの姿があった

「なに、彼に生きててられると、いつまでたつても封印が解けないんでね」

「デーモン、てめえ」

突然アルファモンがデーモンに斬りかかった

「封印だか何だか知らないが、戦えないやつ相手にあんなことするお前を、許すわけにはいかない」

そういつてアルファモンが再度切りかかる、が、先ほどから動きがぎこちない

「どうやら先ほどベルゼブモンとの戦いで見せた形態はかなり負担がかかるようですね、加えてダメージも残ったまま、果たしてあなたに私を倒すことが出来ますかな」

「倒してみせる！絶対に！」

そういつて剣を振り上げるアルファモンだが

「遅い！」

あっさりよけられてしまう

「フレイムインフェルノ」

更にデーモンの反撃をよけられずもろ喰らってしまう

「ぐあああ」

「やれやれ、もう終わりですか、フレイム……………」

「セフィロートクリスタル！」

水晶がデーモンの攻撃を妨害する

「間に合ってよかった」

オファニモン達が到着したのだ

GATE：34 憤怒（後書き）

というわけで

デーモンとの戦いに突入しました

いや、一応敵キャラで登場させたんですが

歴代のベルゼブモンがみんないい奴だったんで（ティマーズとかク
ロスウォーズとか）

こっちのもいいやつにしました

そういえばクロスウォーズのベルゼブモン

一時期出番めつきり減りましたけど

毎回毎回おんなじデジクロスばっかになるよりよかったんじゃない
でしょうか

ベルゼブモンが仲間になつてからは毎回K4B

スパロウモンもまたしかり

ベルゼブモンは元からクロスローダーに入らず別行動、にもかかわ
らずほぼ毎回登場してましたし

X4以降はバリエーションがいくつか別れてるので

マンネリ化を避けるためには仕方なかったんだと思います

以上、ベルゼブモン特集でした（今回後書き長くてすみません）

GATE・35 悪魔（前書き）

ハイ、というわけで

GATE：35 悪魔

「エデンズジャベリン」

オファニモンがデーモンに向かって攻撃するが軽くかわされる
「まだだ」

よけた先でアルファモンが斬りかかるがこれもかわされてしまう
「おやおやずいぶん息が上がっていますね」
デーモンは余裕の表情だ

「ではこちらも……本気で行きましょう」

そういつてデーモンが一気に力を解放し黒い光が放たれる
黒い光が晴れたあとにはまさに悪魔デーモンの名にふさわしい
まがまがしい姿があった

「これが我が真の姿、そしてこれが」

デーモンが口にエネルギーをためる

「真のフレイムインフェルノです」

デーモンの口から膨大な量の炎が放たれた

「王竜剣！」

形態変化したアルファモンの攻撃が炎を吹っ飛ばした

「ほう、なかなかのパワーだ、だが」

「はあ、はあ、はあ」

「どうやらまだ扱いきれいな様子ですね」

「拓馬……」

「頼むセラフィモン！俺はまだこの力をうまく扱えない！だから……」

「わかってる、僕達が攻撃するから、君は援護してくれ」
そういつてセラフィモンは飛んで行った

「エデنزジャベリン」

「フレイムインフェルノ」

オファニモンとデーモンの攻撃が衝突する直前、アルファモンの飛ばした衝撃波がデーモンの攻撃を打ち消した

そのままオファニモンの攻撃が命中する

「よし、だいぶ慣れてきた」

アルファモンがそういつて片膝をついているとデーモンの腕がアルファモンに向かって飛んできた

「まだまだ！この……………！」

が、足がすくんでしまい間に合いそうにない

「アルファモン！」

突然剣から放たれたシールドがアルファモンを守った

「どうした、アルファモンよ！我を屈服させたあの覚悟、今一度見せてみよ」

アルファモンの頭の中にオウリユウモンの声が響く

「その覚悟……………その剣にぶつけて見せよ！」

シールドが砕けたかと思うとアルファモンから金色のオーラが放出されていた

強く、大きな輝きが

「デーモン」

そういつてアルファモンが剣を構える

「おまえを……………倒す！」

そしてアルファモンが一瞬のうちにデーモンの背後を飛んでいた

「馬鹿な……………」

デーモンの大きな体に線が走ったと思うと一瞬のうちに消滅した

「オウリユウモンの力を使いこなしたか」

水晶球越しに見ていたルーチェモンが立ち上がる

「これで……………6つの封印が解かれた」

「凄いじゃない拓馬！あの力を使いこなすなんて？」

「いやー、自分でもどうやったかよくわかんないんだけど」

「とにかく、これで僕たちは大きな力を手にした」

と、拓馬たちが話しこんでいると

「あれ？」

プロットモンが何か見つけた

「あんだ……………誰？」

そこに立っていたのは小悪魔みたいな小さなデジモンだった

「……………インプモン……………」

「いや、誰？」

GATE：35悪魔（後書き）

バレバレですね

というわけでデーモンを倒したわけですが

終盤にまさかの新キャラ登場

封印については次回明らかになります

というわけで次回も楽しみにしていただけると幸いです

GATE：36封印（前書き）

前回デーモンを倒した後で出現したインプモン

果たして彼は何者なんでしょうか

そしてデーモンとかがちよくちよくいつてる「封印」とはなんの
となのか

それではどうぞ

GATE：36封印

「だから……お前誰？」

「それより七大魔王ぶつたおすんだろ、来いよ、最後の七大魔王のところに案内してやる」

そういつてインプモンは歩き出した

「あのデジモン……何処かで会ったような」

そう呟いていた卓だが素直にインプモンについて行く

「で、誰なんだ最後の七大魔王って、インプモンなんか知ってるだろ」

インプモンの案内で彼らは塔らしきところのらせん階段を歩いていた

「ルーチェモン、奴は普段は天使の姿をしているが、他の七大魔王がひとり倒れるたびその力を吸収していく、他の七大魔王にはそういう術がかけられていた」

「なぜそいつだけに術をかける必要がある」

「本来ルーチェモンは光と闇、二つの力を併せ持つ魔王型デジモンだ、だが奴は自分の力を完べきなものにすべく、究極の光の力と、究極の闇の力を入れるため動きだした、この世界の神に喧嘩を売ったのさ」

そうインプモンが話すと舞が何かに気付いた

「ちよつと待って！じゃあルーチェモンが狙った究極の光の力って」

「そう……イグドラシル」

「……！！」

「やつは光と闇、二つの究極の力を得て、世界を我がものにしようとした、だが長き戦いの末失敗し、闇の力を奪われたんだ、イグドラシルを倒すのと引き換えにな」

「すべての発端はそのルーチェモンだったのか」

ここにきてすべての糸が繋がった

「戦いの後で七大魔王デジモン達はイグドラシルを運び出し、細工を施した、死んだデジモンの屍が闇の力に変換されるようにな、死んだデジモンのデータは一か所に集められ、保管してある」

「それが究極の闇の力」

「もともとは七大魔王デジモン達を使うはずだったが、失った自らの闇の力を補う程度でしかないとため、その細工を施した」

「あつれ〜、おっかしいなあ〜」

「せん階段のてっぺんまで来たところで少年のような声がする

「なんで一端の成長期デジモンがそんなこと知ってるのかな」

「……………ルーチェモン」

「そう、ルーチェモンがいる部屋にたどり着いたのだ

「まあいいや、察しの通りこれが、究極の闇の力」

「そういつて後ろのまがましい球体を指すルーチェモン

「そして君達のD・ウォッチに宿る究極の光の力……………イグドラシルですべては完成する」

「そういつてルーチェモンの体にロップモンが暗黒進化した時のような炎がまとわりつく

「私は唯一無二、完全無欠のデジモンとなるのだ」

ルーチェモン フォールダウンモード

傲慢をつかさどる七大魔王最強のデジモン

必殺技はデッド・オア・アライブ

「さあ、ファイナルステージの始まりだ」

「セブンスヘブンス」

「ライトニングスピア」

オファニモン、セラフィモンの攻撃をルーチェモンはたやすく回避する

「エデンスジャベリン」

すかさずオファニモンが追撃するが

「パラダイスロスト」

ルーチェモンが自分の光線をぶつけて相殺する

が、アルファモンがそんなルーチェモンに斬りかかる

既に王竜剣へと変化していた

「まずい！」

これは流石にまずいと思ったのか慌ててルーチェモンも距離を取る

「流石に一筋縄ではいかないか、ならば」

そういつてルーチェモンは右手に白い光を、左手に黒い光を集める

「これでどうだ！デッド・オア・アライブ」

二つの光が一つになってアルファモンに向かって飛んできた

「くっ」

剣を使い防ぐアルファモンだがエネルギー量が半端じゃない

「ぐああ」

抑えきれずに吹っ飛ばされてしまう

「大丈夫か」

すかさずセラファイモンが受け止める

「ああ、だがもう一発食らえば」

「大丈夫だ……ゴニョゴニョ」

何かアルファモンに伝えるセラファイモン

「何の相談か知らんがここまでだ、デッド・オア・アライブ」

もう一度さっきの攻撃が飛んでくるが

「終わりなのはそっちだあ！」

すぐさまアルファモンが斬撃を放つ、なんとルーチェモンの攻撃は

あっさり消滅してしまった

「な！」

そのままルーチェモンは斬撃で吹っ飛ばされ球体にたたきつけられる
更にルーチェモンがぶつかった衝撃で球体にひびが入る

「くっ、なぜだ」

「おまえの闇の力が強すぎたためだ」

疑問視するルーチェモンにセラフィモンが答えた

「おまえのあの技は光の力に比べて七大魔王を媒介にしている分闇の力が大分上回っている、その分確かに破壊力はあるがエネルギーのバランスが悪く、極端にもろくなつたわけだ」

「くそっ……………ん？なんだこれは！？」

拡大した球体のひびから黒い腕のようなものが現れルーチェモンをつかんでいた

「よせ！やめろ！何を！うわあああああああああああああ！」

そのままルーチェモンは腕に引き込まれ球体の中に取り込まれてしまった

「な……………何が？」

ケルビモンの疑問の答えはすぐに出た

球体のひびが完全に砕け、漏れ出した暗黒のエネルギーが何かを形作っていた

「これは……………まさか！」

オファニモンの予想は悪い意味であった

次の瞬間ひびがふさがつたと思うと漏れ出したエネルギーが禍々しい怪物の姿となつた

GATE：36封印（後書き）

うわ、デジモンアナライザー久々

いつ以来だ本当（汗）

たぶん最後に使ったのオウリュウモンのときだと思っただけど

というわけで長いこと続いたこの小説も間もなく完結を迎えようとしていきます

もうデジモンファンの人達はルーチェモンがどうなったか想像つくでしょうが

次回も楽しみにしていただけると幸いです

………にしてもちよっと演出こりすぎたか、想像してみると最後なんか怖いな

GATE：37 混沌（前書き）

さあ、いよいよ真のラスボスの登場ですよ

果たして拓馬たちはこの強大な敵を倒し

デジタルワールドに平和を取り戻すことができるのでしょうか

GATE：37 混沌

「こいつ……闇に取り込まれたのか」

セラフィモンの言葉とともにルーチェモン？が雄たけびを上げる

ルーチェモンサタンモード

巨大な暗黒竜の姿をしたルーチェモンの最終形態
必殺技はパーガトリアルフレイム

「闇が強大すぎた故に、ルーチェモン自身も取り込まれてしまった、この力は危険よ」

そういつてオファニモンが技の構えに入る

が、次の瞬間ルーチェモンが吐いた炎が辺り一面を包んだ

全員その炎に飲み込まれてしまい、ルーチェモンは何処かへ飛び立
った

「これは……」

一方デジタルワールドもあたり一面が闇に覆われていた

次の瞬間、ガルダモンの周りの地面が粒子となって崩れ始めた

「この世界が消えていく……これは一体！」

「ん……これは」

拓馬が目を覚ますとインプモンが覗き込んでいた

「大丈夫か？」

「ここは……？」

「結界の中だ、見る」

そういつてインプモンがさした結界の外は

まるで宇宙空間そのもの

なにもない無の空間だった

「これは一体」

舞達も目を覚ましたらしく外を見てあぜんとする

「おめえらが気絶している間にデジタルワールド全体がルーチェモンのゲヘナに取り込まれたんだ」

「ゲヘナ？」

「野郎が抱えてる球体だ、ルーチェモンがぶつかったショックで割れて、漏れ出した闇の力が暴走を始めたんだ、あの力は危険すぎる、じきにお前らの世界まで浸食を始めるだろう」

「そんな……」

真琴がショックを受ける

「俺達の世界が……」

ドルモン達も悔しそうだ、すると何を考えたか、舞がD・ウォッチを外した

「舞……何を？」

「受け取って兄さん、こうなってしまった以上、王竜剣の力を持ったアルファモンに頼るしかない」

「そうだな、頼む、拓馬」

「残された希望は、あなただけ」

舞の言葉に賛同するかのように卓、真琴もD・ウォッチを外し拓馬に手渡す

拓馬はその受け取ったD・ウォッチを両腕に二つずつつけた

「よし、お前たちの気持ち受け取った！行くぞドルモン」

「おう！」

「がああああ！」

ルーチェモンははまだ暴走状態だった

が、突然アルファモンが頭に剣を振り上げ傷を負わせた

「よし」

既に王竜剣となっている

今の一撃は聞いた様子だ

が、次の瞬間ルーチェモンの傷がふさがりアルファモンに炎が浴びせられた

「兄さん！」

「なんなのあれ？」

「わからない、再生能力があるといつても完全にふさがることなんてあり得るのか」

一応結界は持続しているらしくその中で観戦している天使トリオ

「くそ、負けられない！この世界を救うんだ！こいつには負けられない！」

そう叫びながら剣で炎を防ぐアルファモン
すると両手と剣が輝いた

「主の覚悟、改めて受け取った」

「若き騎士よ、その覚悟を認め力を貸そう

一つはオウリユウモンの声

だがもう一つは全く聞き覚えのない声だ

「これは一体」

「わが名はイグドラシル」

GATE：37 混沌（後書き）

というわけで

ゼポリューションとかセイバーズじゃ敵になってたイグドラシルですが

今回味方に見えました

いよいよクライマックス、というわけで次回も楽しみにしていただけると幸いです

GATE：38 奇跡（前書き）

てことで

前回オウリユモンとイグドラシルが語りかけてきました

果たしてアルファモンはルーチェモンを倒し

この世界に平和を取り戻せるのでしょうか

GATE：38 奇跡

「イグドラシル……………」

「われらの力解き放とう」

イグドラシル達の言葉とともに両手と剣からの輝きが強くなり
光に包まれたアルファモンの体は金色に輝いていた

「凄……………」

その輝きの美しさに卓達も感嘆の声を漏らす

「そんなことより卓、ルーチェモンの弱点を探ることが出来ないか
しら」

「呼び捨てなんだ……………、僕も必死に考えているよ」
そういつて戦いのほうに視点を移す卓だった

「王竜剣」

剣撃でルーチェモンの首筋を切り裂いたアルファモンだったが

「ぐるあああ！」

やはり効果がなく、再生して反撃の構えに出るルーチェモン

「くそつ、あいつの弱点は一体何なんだ」

卓も思わず爪を噛む、が、思いつきり噛んだせいで爪が割れてしまう
「いてつ、あゝ、血出ちゃったか」

「この世界でも血でるんだ」

「割れて……………血が……………そういえばあの時」

卓は思い出していた

確かサタンモードが出現した時

球体にルーチェモンが吸収され、ひびから現れた黒い影が……………怪物に！

「そうか！わかったぞ！」

いきなり大声出す卓にびっくりする結界の中のメンバー達

「どうしたの卓、ぼくびっくりしたあ」

そういつて卓の頭の上に垂れこむパタモン

「わかったんだ！やつの弱点が！拓馬あ！」

大声で拓馬に伝えようとす卓

「あの怪物は闇の力が作った影！本体は」

そういつて卓が指差した先は

「あの球体の中だ！」

ルーチェモンのゲヘナだった

「あの球体？……そうか、ルーチェモンはあの中に吸収された、だとしたら」

「あの中に本体が居るはず」

アルファモンもそれに気付いた

「ならばあの球体を砕くまで」

そういつてアルファモンは剣で天を仰ぎ

「喰らえ！」

エネルギーを思いつきりため込んで衝撃波を打ち出した

打ち出された衝撃波はゲヘナごとルーチェモンを真っ二つに切り裂いた

ゲヘナは砕け、中から小さな虫のようなデジモンが転がり込んだ

「あれがルーチェモンの本体か」

一方のサタンモードもゲヘナが砕けたことにより形を保てなくなり四散した

「なんか勝手に自壊した！？」

「お、おのれ」

転がった本体が立ち上がった

が、アルファモンが急に膝をついた

「くっ」

こちらにも進化を保てなくなりドルモンと拓馬に分離してしまった

「馬鹿が、進化を保てなくなっただか、お前などいつでも始末できるが……………まずはこいつらからだ！」

そういつてルーチェモンは舞達に突っ込んでくる

「しまった！僕達のD・ウオッチは今！」

するとどこからか心地よい香りが漂ってきた

「嘘……………この香りまさか……………」

真琴のつぶやきとともに上空から誰かが降りてきた

「マーブルショット！」

突然の砲撃にルーチェモンはかわすので精いっぱい
そしてその砲撃を打ったのは

「ライラモン……………」

そう、真琴を庇って死んだはずのライラモンだった

「え！？この人がライラモン？」

それだけではなかった

「サンダークラウド！」

大量の雷が降り注ぎルーチェモンがかわしているところへ

「バテーム・デ・アムール」

天使のようなデジモンが突っ込んでいった

「ウィザーモン！」

「それにダルクモンも」

思わず後ずさるルーチェモン

「おのれ……………貴様らなげ」

「ゲヘナが砕けたことにより、今まで吸収したデータが解放されたのだ

そう呟いてルーチェモンの背後に立っていたのは

「マグナモン！？」

更にインプモンも突然歩み始める、その体は輝いていた

「終わりだぜ……ルーチエモン」
光が収まった後には銃を構えたベルゼブモンの姿があった

GATE：38 奇跡（後書き）

はい、やっぱりインプモンの正体あいつでしたね

あ、てか今回いつもより長くなったかも

さて、いよいよ完結に近づいてきてますね

本当長かった

それでは次回も楽しみにしていただけると幸いです

GATE：39 終結（前書き）

というわけで

マグナモンやライラモン達が奇跡の復活

果たしてこの戦いの結末とは

GATE：39 終結

「これまでだ、ルーチェモン」

ベルゼブモンが銃を構える

「おまえ生きてたのか！？てかなんでインプモンの姿で!？」

「俺も力を失いかけてたからな、デーモンの攻撃で力を完全に失って退化してたんだ、記憶が残っていたのはたまたまだ」

「たまたまつて……………」

こんなシリアスな時にいうことでもないだろう

「話はあとだ、まずは」

そういつて再度銃を構えるベルゼブモン

「こいつを始末する」

ベルゼブモンの攻撃でルーチェモンの本体が貫かれた

「馬鹿な……………このようなことが……………」

そしてルーチェモンは叫びをあげて消滅した

「ライラモン」

結界から解放されてすぐ真琴はライラモンに飛びついた

「よかった、本当に良かった」

「もう、また泣いてるの、ほら、笑顔笑顔」

そういつて胸中の真琴をあやすライラモン

「みる」

そんな中マグナモンが指差す先で、地球によく似た惑星が構築されていた

「もしかしてあれは……………」

「ああ、デジタルワールドだ、ゲヘナが砕けたことで我々同様再構築されている……………それに」

そういつてマグナモンが背後を見るとたくさんのデジモン達がエルドラディモンやバロモン

なかにはジュレイモンやナノモンなんかも交じってる

「我々デジモン達もな」

「これからは光と闇、お互いに協力して時代をつくっていく必要があるな」

そういつてベルゼブモンは銃を上にも構える

「静まれ！」

ベルゼブモンのこの声で一斉に静かになるデジモン達

「戦争は終わった、我ら闇の陣営はこのベルゼブモンの名の下、降伏を宣言する」

そういつて銃を地に置くベルゼブモン

「戦いは終わったのだ」

マグナモンの付け加えた言葉で和解は成立したらしく、騒いでいたデジモン達が仲良くし始めた

「ありがとう、拓馬」

ダルクモンが拓馬たちのそばに寄ってくる

「ダルクモン、よかった無事で」

「ええ、古いデータはどうやら再構築できなかつたようですが」

「あ、それでマグナモンの他のロイヤルナイツが見当たらないのか、あつたことないけど」

「それでもあなたたちは私の信じたとおり、戦乱の世を終わらせてくれた」

「これで君たちの役目は終わった………元の世界に帰る時が来たのだ」

マグナモンの言葉で一気に沈んだ表情になる拓馬達

「一日だけ時間をやる」

「よっ」

復興したデジタルワールドに座り込んでいた拓馬達の前にベルゼブ

モンが現れた

「ああ、わるいなベルゼブモン、もうお前の相手はできそうにない
そういつてドルモンが話しかける

「いいさ、俺も闇のデジモン達をまとめるので手いっぱいだしな
そういつて立ち去るベルゼブモン

「卓、さみしいよ」

「ああ、だが僕達はずもともこの世界の住人じゃないんだ、それに
いつでも一緒さ、きつと2つの世界はどこかでつながっている、完
全に離れ離れになるわけじゃないんだ」

そういつてパタモンを抱きしめる卓

「プロットモン……………」

「とうとう来たんだね、別れの時が」

かつてのようにプロットモンを抱きながら、エルドラディモンの一
室で窓の外を眺める舞

「みんなと違って……………私はここに長くいすぎた……………」

そう呟く舞の目には、初めて涙が浮かんでいた

「そうね……………私もさみしいよ」

「プロットモン……………」

「真琴……………」

「ライラモン……………」

ライラモンと初めて会った花園で座っていた真琴のところにそのライ
ラモンが訪ねてきた

「もう……………行っちゃうんだね」

「なんでだろうね、本当、あのときのこと懐かしく思えてくる」

そういつて涙をこぼす真琴だったが

「ライラモン、あなたのおかげで私は強くなれた、それにロップモ
ンも」

涙を拭いて二人のほうを見る真琴

「今までありがとう！」

最後に真琴は精いっぱいの笑顔を見せた

GATE：39 終結（後書き）

………というわけで

次回最終回です！

もうちょっとで1年行きそうだったんですがね

それでは最終回、楽しみにしていただけると幸いです

GATE・FINAL帰還(前書き)

というわけで

いよいよ元の世界に帰る時が来ました

………もう最後なんでこれ以上のことはないません

GATE：FINAL帰還

「いよいよだな」

台座に拓馬たちのD・ウォッチを乗せマグナモンがつぶやく
周りには今まで拓馬達が出あったデジモン達が

「この世界を救ってくれたこと、感謝する、そしてこれからは元の
世界で幸せに暮らすんだ」

そういつてマグナモンがD・ウォッチに手をかざすと

光が拓馬たちを包みそして消えた

「行っちゃったね」

パタモンがさみしそうにうつむくが

「何、これからは俺達の力で、この世界を守っていくんだ」

ドルモンの言葉に皆賛同する

「あばよ、拓馬」

いきなり拓馬の家のリビングが光ったと思うと4人は落っこちた

「いつてえ〜……………ここは」

「私たち、帰って来たんだね」

「ここが、私の家……………」

「って言うか、よく考えたら彼女のことどう説明すれば」

そう呟いて舞のほうを見る卓だったが

「なんだお前たち、そんなところにいるのか」

拓馬の父が奥の部屋から戻ってきた

「昨日は一体どこ行ってたんだ？」

「は？きのう？」

そう言われ卓が自分のデジタル時計で日にちを確認する

「一日しかたつてない……………？」

「嘘だろ、一年近くいたんだぜ俺達」

「私は7年」

「おまえたち一体何を……大体その女の子は」
拓馬父そこまで行ったところで気付く
舞のしていた腕時計と、彼女から感じる、母の面影に
「そうか……無事だったんだな」
そういつて拓馬父は舞を抱きしめる
「よく戻ってきてくれた」
「ただいま、お父さん」

2年後

真琴がライラックの花壇に水をやっていると舞が通りかかった
「こんにちは舞」
「こんにちは、そんなことより早くいかないと始まっちゃいますよ」
「そっか、今日は……」

とある高校のグラウンドで野球部の一年生たちが紅白試合をしていた
ピッチャーの投げた球がミットに吸い込まれる

「拓馬、ナイスピッチ」
そういつて卓がヘルメットを脱ぐ
「さあ、次の攻撃が最後だ」

9回の表

卓が打ったことにより塁に出た
「あいつも打てるようになったか」
GATE：0で少年野球チームの監督をやっていた人物が感嘆の声を漏らす

因みにこの人、今はこのコーチだ
「だがこれで次の拓馬にはタイムングを指示できない、どうする」
そういつてバッターボックスに向かう拓馬を見るコーチ

「やってるやってる」

「いけー！兄さん！」
舞と真琴が見学に来た

そして卓は1塁から拓馬を見る
拓馬はピッチャーが投げた球を
全力で打った

「ゲームセット」
「ありがとうございました」

あれから二年

「ん」

「大丈夫か舞！？」

「もう、あわてて食べるから」

「ほら、お水」

俺達は舞が加わったこと以外、以前とほとんど変わらない生活を送っていた

それでも俺達は忘れない

あの冒険の日々を

GATE：FINAL帰還（後書き）

というわけでデジモンGATEstory

完結です！

いやー、長かった

それでは今まで読んでいただきありがとうございます
しかし、食べ物などに詰まらせてり大声で応援したり
舞、ずいぶんキャラが柔らかくなりましたね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4980n/>

デジモンGATEstory

2011年6月6日12時11分発行